252

特230
325

里介山著

日本の一平民として

支那及支那國民に與ふる書

春陽堂版

始

特230
325

日本の一平民として

支那及支那國民に與ふる書

中里介山

昭和七年

序

余は本年の七月から八月にかけて、孤身漂然として南支から北支滿韓を一遊して來た。これは多年の宿望の一つとして、半生を期して支那及支那人を描かんが爲の第一歩といへば云へる。

百聞は一見に如かずといふ云ひ古した通り言葉は、いつの世にも文字通りに通用する、歴史的に支那といふ名前を聞くこと幾千年、その書物を讀むこと幾千百、それに何十倍する活力を、僅か一ヶ月間の見聞が與へて呉れたことの神妙さを今更の如く痛感した。

それは、歴史と風物だけの印象のみではない、現在の事實、時事問題中の時事問題でありながら、正直の處われわれには何が何だか分らなかつた。事實支那が增長してゐるのか、日本の帝國主義が種を蒔いたのか、或は日本の外交に支那を增長せしむべき所謂軟弱振があるのか、假に國際以上に立つて見下した場合、その責任何れに在りやといふやうな公明な裁判は吾々には覺束ないものゝやうに考へられてゐたのが、僅々たる旅行に依てはつきりとそれを解釋することが出來たと思ふ。

日本の最も通俗なる諺に「可愛いゝ子には旅をさせろ」といふ事がある、苦勞人の云ひ殘した言葉として、地に落

ちない味がある。もう一つ「旅は道づれ」といふのは、旅には道伴れが必要だといふ意味よりは、旅路に於て道伴れが出來てはじめて人情の眞味が分るといふ意味にとるがよい、旅には道伴れが必要である、團體旅行がよろしいといふ意味に取つてはならぬ。矢張り旅の眞味は獨り旅に於てはじめて本當に味はれるものである。

今回の旅行に於ても余は豫備知識も乏しく、語學は皆目分らず、知己は一人も無しといふ有樣で、支那旅行をして來たのである、といへば如何にも大膽なる冒險者か何かのやうだが、さうではない、汽車汽船の一等賃金旅客として週遊切符を購ひ、それを抱えて行く先き行く先きの日本人宿を頼つて、極めて親切な一切の世話を受け、小心翼々として一わたり渡つて來たのだから、別に勇者でも冒險者でもあるわけのものではないが、然しながら、獨り旅は獨り旅で特別に保護や便宜を與へられたり、よい處ばかり見せられる招待客の意味でもなく本當に獨りで終始したのだから、自然修飾の無い風當りが、ヒシと身に迫ることも無かつたではない。少くとも團體旅行や、招待旅行のやうな多少の群集心理による强味が無いだけに、人情そのものゝ風當りに直接することの分量が多かつたといふ特長は爭はれなかつた。それ故に、僅かの旅ではあるけれども豫想外に深甚なる感觸があつたことをも自覺せねばならぬ。本來は單純なる支那の歴史と文學と風物とに憧れて遊歴を志した尋常の觀光客の一人であること以外には何の豫期もなく、ブラリと出かけたのに、それ以外の時事に對して多大なる感慨を充たされて歸つたことは全く豫期しない收獲であつた。

三千年來の支那の文物は慕ふべく、自然に暢生する支那人は愛すべしと雖も、今の中華民國政府の爲す所は無智にして有害を極め、日本に對して容易ならざる冒瀆と增長のうちに自他を傷けつゝあることを看取し、も早や日支の交渉は武力的解決の外に術のないことを直覺して豫言し、人類の不祥を痛歎しつゝ歸來匆々筆を執つて日本の一平民として支那國民に忠告せんとする書を起草中、果して滿洲事變が突發してしまつた。斯くて筆を進めつゝ、事の成行を觀察するうちに國際聯盟の開催を聞き別に慨然として

この稿を書きつゝある時、國際聯盟が干渉をするとか、しないとかいふことが問題になつた。無論聯盟としては口出しをしない方がよし、若し何か提言をされた場合は日本は參考として承り置く、とあしらつて置けばよいと思ふ。聯盟が自分達の理想と實力を過信しすぎた時は、聯盟自身の不幸である。事の起るは起るの日に起るのではない。平常の直接した平和科學をおろそかにして事ある時にのみ干渉を試むるのは、暴風雨に當つて垣根を拵へに行き、切られた後に血を出すなといひ、或は、肺病患者に向つて咳をするなといふやうなものである。參考としての忠言は自由であるが、高壓的リードの氣分が少しでもあつては、却つて事を惡化せしむる。この點は國際聯盟の委員諸君が冷靜淡白でなければならぬ點である、同時に當事者としては虛心、坦懷にそれをきゝその影に怖へてはならない處である。

薩ながら如ういふ忠告的述懷を記して見たが事は豫想の通り惡化して進んで行つた。余は日本が此の度の行動に出

づることを、必至の勢だと見る。是非は暫く論外に於て時の勢より見れば、日本の國力の發動は少しも無理の無い處である。寧ろ遲くとも早過ぎる憂は無かつたのである。同時に所謂認識不足なる國際聯盟の有害無益なる干渉を憤り日支の事は到底日支のみを以て處理すべきことを、ひとり痛論してゐたが、遂にこの一篇を公けにして廣く內外同憂の士に訴ふる所以となつた。對支の事に就ては名著も多く、志士論客も少なくはないけれど、文筆にたづさわる一平民として、親しく事變直前の支那內地を見たるは偶然にも余を以てその最終にして唯一のものとするかも知れない。

惟うに爭鬪の時は短く、平和の時は長い。我々は支那要路の野心家の迷妄と增長とを懲らす事に最强力を使用するの必要に迫られつゝも、尙ほ隣國としての國その者、隣人としての人間その者を愛するの心情を潤渴せしめてはならない。一旦は力の間に相見ゆるとも、やがては彼と相親しみ相睦び相助けて東亞の天地より眞正の平和の光明を開かねばならぬ使命にあるものである。「日本の一平民として支那及支那國民に與ふる」涓滴の微衷は斯くの如くして湧いた。執筆のうち時事は刻々に變化する、筆路も奔逸して體を成さない處が多いけれども、要するに隣人に對する忠告であると共に、一切の國と人とに對し、また吾自らの反省でなければならぬ。尙ほ余は、特に日本の國の現狀につきては別に一書を作りて識者の敎を請はんと期してゐる。

昭和六年十一月

隣人之友社、書屋にて　著　　著

日本の一平民として

支那及支那國民に與ふる書

中里介山

支那及び支那國民諸君。

あなたの國と吾々の國とが今や拔き差のならないやうな感情に遮ぎられ、この儘で進みますならば個人としても國家としても最惡の處へ行つてしまはねばならなくなりました。その影響がお互の間のみならず世界の人心をすべて暗くして居ります。さうして各々世界の要路の人が必死になつてこの惡空氣の退散を試みようと努めて居ります時に我々風情が

彼是申したとて何如とも爲し得るものではございますまい、我々のみならずこの世界を選ぐつての要路の人々と雖も、歴史と因果との大きな力を如何とも爲し得るものではございません、さりとて已むにやまれぬ心から敢てこの一平民の言葉を致し見んとの微衷なのでございます。

さて、まづ私は、事の順序として、斯く申上げる處の私といふ存在物の何者であるかを一應御諒解を願つて置くの義務があることを感じます、それは私が日本の國に於て、政治的或は社會的に重要な地位を占めてゐるとか、或は何かの才能によつて私の名が世界的に宣傳力を持つてゐるならば、そんなことをする必要はないのでございますが、何をいふにも、私は日本に於ては平民中の平民でございまして、世界に於ては私の名を知るものさへ無いと云つてもよい者でございます、日本に於てこそ一個の文人として、その著作物によつて多少の名を知る者もございませうが、併しながらこの點に於てすら本當に傳へられてもゐず又本當に理解されてもゐないのでございます。私といたしましては私の書いた著作

物の一つは、小説の形式をとつて現はされてゐますが、これに若し特異性がありとすればそれは日本人といふものを多方面に、最もよく(?)寫してあるといふことゝ、その分量が世界の文學史上の最大長篇になつてゐるといふことなどであるかも知れません、この小説は日本に於ては當代最も廣く讀まれてゐるものゝ恐らく第一等かも知れませんが、私はこの度あなたの國を旅行中、ふとあなたの國の外交部の顯官にお會ひしましたが、その方もよき理解をもつて私の著作を讀まれて居らるゝことを知り、存外の知己を海外にも有することを知つたやうな次第でございます。

けれども、私の名はマキシムゴルキーが支那日本へ遊びに來るといふことだけが、既に世界の新聞の好題目となるといふやうな種類のものではなく、又リンドバークといふ亞米利加の軍人飛行家が訪問することによつて世界の新聞を熱狂せしむるといふ程度のものでもございません。然し又或人は申します、君のやうな人を亞米利加か或はラテン系の國々に生れしめたならば、君の行動は世界的に電波せられることなしには存在が許されぬやう

にされたのであらう、また、さうでないまでも日本のある閥力の間に生れたなら君の名の威力ももう少し手答へがあるか知れないと、これは妙な云ひ廻しかも知れませんが、何れにしても私共の云ふ事動くことのそれが何等世界的に重きをも輕きをも加へるものでない如く、この日本の國におきましても私といふものゝ存在はどの方面に向つても重きをも輕きをも加へる理由とはされて居りません、全く私は日本に生れた平民中の平民なのでございます。

それを自ら卑めて云ふわけでもなく、それをまた自ら誇りとして云ふわけでもございませんが、恐らく私位完全に日本の平民中の平民としての資格を與へられてゐることも珍らしくはないかと思ひます、例へば、私は日本の首都東京を去ること十數里の武藏野といふ平野の水邊に生れましたが、漸く日本國民が最も普通受ける處の小學校教育を辛うじて受けた外には教育といふものゝ特別な恩惠を受けたことがございません、國家の建てた大學に入つたこともなく、それに准ずる大きな教育機關のお世話になるだけの餘裕を與へら

れてはゐず、いままで學を志し職を求めましたけれども、日本の政府から一錢の俸給も貰つたことはなく、ましてや爵位勳等稱號表彰等の有ゆる特典に浴したこともなく、又特に官邊より招待、入場等の好意をさへ只の一度も寄せられたことはございませんから、日本の平民の最も普通なるレベル以上には一歩も出でゝゐない人間でございます、さうしてたゞ取柄としては日本の國の法律刑罰の御厄介になるだけは免れて、人樣には借金もせにどうやら生きて行つてゐる人間なのでございます。

これは私といふものが、いかに微賤取るに足らざる人間であるかを證明する一方に時としては非常な有利なる事情も無いではございません、若し私が、一擧一動總て世界の電報通信の御厄介になり、その行く先々の新聞に私の肖像が掲げられたり、記事が出たりするやうでもあつた日には、私の如き我儘と怯惰の者は實にたまらないことでございませう、本當に悠々たる行路の心をもつて旅行することも出來ず、靜粛たる澄心をもつて人に接し書を讀むことも出來ないでありませう、また私に何か特別の色彩光榮といふやうなものが

ありましたならば無雜作には、あなた方に呼びかけられない氣兼と慢心とが存してゐたかも知れません、斯くて私は事々しく日本の平民中の平民を標榜することによつて、お互人類同志の平民として呼びかはすことに煩累を生ずることとは思ひ及びません。

それはそれとして、私は今回も（今年卽ち滿洲事變の直前たる七月と八月）その悠々たる氣分と怯惰なる特性をもつて只一人ブラリとあなたの國へ旅行に出かけたものでございます、恥かしながら私は足一歩海外に出るといふことは、四十七歳の今日になるまでこれが始めてゞございましたが、その出發の氣分に於ては日本內地の旅行の延長と少しも變りませんでした。

旅行といふものは本來私は好きな方でありまして、日本の內地だけはかなり歩きました、そして旅行といふものはいつも一人ですることを最も好んで居りました。曾つて斯う云ふことを書いたことがあります。

誰れにしても「旅行」を好まぬものはあるまい、甚だ稀には出不精といふ人もあるが、

旅行を好む心は萬人共通の心といつてよろしい、蓋し人間の生涯そのものが一つの旅行であるから。そこで人が人生を縮寫する意味に於て旅行を好むのかも知れない、人類の祖先には遊牧の民族といふものがあつて、生涯そのものを旅行として、定住が却つて變則であることもあつた「日月は百代の過客にして往きかふ年も亦旅人也」とは漂泊を生命とする詩人の憧れのみではない、誰れでも相當にその感じを味ひながら現實の生活に却つて慰安を見出すのである、旅を好むのは人間の先天性に出づるのであらう、「可愛い子には旅をさせろ」といふのは旅の味ひを實行的に見たものであるが、旅といふものは人生に敎へるといふよりは人生そのもの丶味であらう、だから旅は直接する程眞味がある、團體よりは少數がよろしく、少數よりは心を許し合つた友と連れだつがよろしく、友と連れだつよりは寧ろたつたひとりの淋しみのうちに旅の眞相を見出すものである、贅澤な旅行よりも質素な行程が樂しく、或は無錢、或は冒險等にまで深い樂しみを見出すことが出來るのである。

たゞ然し、旅によつて己れの眞相を見やうとしないで、變る風物に幻惑されてしまつた日には旅は人の心を消耗せしむるのみである、エマーソンは「旅行は愚者の天國なり」といつたのはこの意味であらう、一日の旅でもよろしい、二日の旅でも三日の旅でも錢があり餘つても餘らなくつてもよろしい、心掛けて旅を味ひたいものである。

といつたやうな心持で、日本内地を旅行すると同樣な氣持で今回あなたの國へ出かけました。

まづ、上海に渡つて、それから蘇州に遊びました。何しても始めての海外旅行ではあり、殊に文學に於ては我々の基本教養の最初の本家といつてもよいあなたの國の風物に目のあたり接して、多感な私にとりましては、見るものの聞くものが感慨の種で無いものはありませんでした、先づ長江の不盡なるに迎へられ、次に大陸の悠々たるに包まれ、五十に近い私をして青年のやうな若い氣分をもつて上海の眼まぐるしい繁華の中を游ぎまはらせ、虎邱にあつては二千年の昔を考へて、少年時代に村塾で敎へられた十八史略の昔を憶

ひ、吳越の盛衰興亡から更にその盛衰興亡を夢として歌ひ出でた盛唐の詩の中に醉はされ自から夢の憧れの地を踏む心地で無邪氣に醉はされてゐました。

本來、私は文人ではありますけれども、政治にも、歴史にも相當の興味をもつてゐる方でありまして、日本に於ける數千年來のあなたの國との交際、それから最近滿蒙を問題としての感情の行き違ひ等にも國民として多少の關心は持つてゐない筈はありませんでしたけれども、斯うなつて見るとそんなことは全然忘れてしまつて、子供の樣な愉快な心持でこの風土に憧れの旅にひたつて居りました。

處が、偶然にも玆に一つの出來事があつて、そのほんの僅かのキッカケから私をして單に風土の觀光者であり、歴史の憧れ人である處の私の頭を、現代に引き戻し、直接にあなたの國の人といふものゝ交渉に觸れしめて私の空想を破り去つたことの一つが起りました。

それはほんの些細な出來事でしたけれども、私は今迄天の星ばかり見て歩いてゐたの

が、急に一つの穴の破れから地上の現在といふものを見せつけられた趣きがあります。

所は蘇州の停車場であります、私は本來こんどを最初として、今後屢々あなたの國へ觀光に來るつもりでございましたから、蘇州、杭州は後日のことゝして、まづ幹線を走れるだけ走らうと思ひました處、出水の爲め線路不通によつて偶然に蘇州驛を上下することになつたのでございます。で、下車する時には週遊券を改札に示し、乘る時には、態々驛長に見せましたが、その時こちらが下車のサインを強いなかつたのが手落ちでした、とにかく蘇州から南京行の列車へ乘り込みまして、茲で氣を許して日本の汽車へ乘り込んだ時と同樣洋服を脱いで和服に着替へて打ち寛いで、これから南京迄數時間の車窓を樂しもうとしてゐるうちに車掌が來ました。そしてこちらの週遊券に蘇州下車の證明が無いといふことが大問題になりました。第一の車掌が第二の車掌を連れて來て小生に向つて嚴重な二重の談判です、私は支那語は一切分りません、英語も殆んどものになりませんが、とにかく覺束ない筆談と英語とで辯明を試みたが、その二番目に來た肥つた車掌が斷じて聽かない

のです、さうしてサインが無いからこれは無効だといふことを嚴重に迫つて來るのです、私はほと〳〵もて餘して了ひました、言葉さへ分れば何とか辯明の方法もあるものを、如何ともしがなき事情に立ち至りました。こちらの考へでは一應の辯明さへすれば、惡意あつてした事でもなし驛員にも驛長にも見せてゐることだから、よく諒解が屆いて何とか取り計らつてくれなければならない、それが鐵道乘務員の乘客に對する禮儀でもあれば職務でもある（私の持つてゐたのは東京から出て、上海、北平、滿韓を經て歸る四ヶ月有効の一等週遊券でありました）

そこで、この驛員の想像外な、又日本の鐵道の常識から云ふてもさう復雜した問題ではないと見て居りました處が、この第二に出て來た車掌の頑强さ加減は全く呆氣に取られてしまひました、仕樣事なしに丁度隣室に居りました大阪外國語學校のY教授に依賴して解決を賴みましたが、同教授が代つて辯明してくれました處、益々意外なのは話の出來る人が出たから納得が屆いたのかと思ふとさうではなく、話が分るから愈々理窟を吹かけてく

れようとの態度でまくしたてるのです。驛員に見せようとも、驛長に見せようとも、驛長は驛長、俺は俺だ。車内のことは俺の權内だ、證明を求めて乘るべきものを證明なくして乘つたのは違法である、故にこの乘車券は無効であると喋々として屈せず論じたてる。Y教授も持て餘して了ひました。これは議論せんが爲の議論である。喧嘩腰のための喧嘩である。日本人なるが故に排日の惡感情をもつて殊更に云ひがかりをつけるのだといふ態度が明らかに見え渡りました。そこで小生はY教授に何とか妥協の道を求めて貰ひ、漸く南京迄の區間を二重拂をすることによつて辛くもこの難關を切り拔けることが出來ました。

僅か一車掌君によつて爲された擧動でありますが、之が爲め夢の觀光客の空想は俄然として破れ、殆んど全支那といふものゝ人間の或る部分を代表してゐる怪物が目の前に出現したかの如く感ぜられて善惡共に全く別な學問をさせられてしまひました。

假りにこれを日本の鐵道内の出來事であつたとして見ませう、私は日本國民全體の公德心、同情心が必ずしも高尚だとも優秀だとも思はないが、恐らく日本の鐵道の乘務員には

こんな勇敢大膽（？）な論客は一人も無からうことを斷定し得るのであります。兎も角もこちらは一等旅客週遊券を持つた身許の確かな旅客である、で責は必ずしもこちらにあるとのみ思はれない過失に對して、斯樣な嚴重深刻な抗議をする無禮非常識な乘務員は日本の鐵道には一人も無からうと信じます、のみならず、斯う云ふ種類の外國旅客に對しては特に叮嚀に取扱ふだけの親切と教養とを日本の鐵道の車掌は持ち合せてゐることを信じて疑はないものであります、縱しあなたの國と日本とが假りに戰爭をはじめた場合であるとしても、あなたの國の身許のたしかな旅人が日本の汽車の中で私と同樣の立場にある時は日本の車掌は必ず相當の好意と禮儀をもつて之を扱ひ「では私が何とか取計らつてあげませう、今後を御注意なさいませ」といふ程度で濟むだらうと思ひます。私はあなたの國の車掌にこの教養のないといふことを、あなたの國の鐵道の爲に、あなたの國の國民性の爲に悲しまねばなりませぬ、その後私は濟南へ着いた時に、汽車の延着の爲に時間に於て二日、精神的迷惑に於て容易ならぬ損失をしました、斯う云ふ不規律と違約とは毎日繰り

返されてゐるに拘らず、さういふ際に於てあなたの國の鐵道は何等の申譯をするでもなし、まして辯償をするでもなく、また聊かも愧ぢ入る色はありません、(時としては旅客の生命財産までが脅かされる事態を頻出せしめながら)鐵道としての任務は無責任であつて、さうしてさゝやかなる人の過失には徹底的に糺明するといふことが、これが單に一車掌、一鐵道の出來事ではなく、あなたの國の國民性の不足なる部分の一切を說明する有力な材料ではありますまいか。

斯くて私は南京へまゐりました。恰度大出水の折柄で、南京市街の處々は水に漬り避難民は驛の構内や沿線に雲集して露宿するといふ有樣でありましたけれども、それでも無事に南京の内外も一通り見物することが出來ました。

昔から南京は王氣があり過ぎる處だと云はれてゐる、成程長江を前に控へて鍾山を後ろにして中山陵の上に立つた時の光景などは例ふべくもなき雄大なものがあります。そこで私は偶然次の絶句を一つ得ました。

南船北馬復玆煩
欲渡長江江水飜
回首中山陵上望
黑風白雨滿中原

もとより本場の方々にお目にかけるやうな代物ではございません、ほんの卽興を二十八字に並べて見たゞけのものでございます。

中山陵の工事は既に完成といつてよい位のものでありましたが、それでもまだ工夫が盛んに働いて居りました。その規模から云へば一個人としての墳墓としてこれより大規模のものは世界にも殆んど無いさうでございます。その附近にある有名な明の孝陵は從來その規模の大きさに於ては世界的のものだと聞きましたが、これに數倍する中山陵の工事はまさに世界第一のものでありませう、これを日本に亡命して來て居られた不遇落莫の一處士孫逸仙氏の當年と比べて何人かその轉變の大いなるに驚かないものがありませう、今の

中華民國に於て、孫中山は英雄或は太祖より超越した神格として推尊されてゐることを見ない者はありません、民族、民生、民權の所謂三民主義を標榜した一平民孫逸仙は、世界無比の土木をもつて墳墓の地を裝飾され、現代支那國民生活とは沒交渉な英雄主義の權化として崇められることの奇觀か威力か或はさうさせることの政略かに就て、之は後に論じて見なければなりませんが、兎に角創設せられたる中華民國は、精神に於ては孫逸仙の三民主義を不磨の經典として奉じ、形骸としては、その墳墓の地を中心にして新たなる支那國を築き成さうとする努力の程は盲者と雖も認めないわけには行きますまい。

それから私は南京市内外幾多の名所を經てハ雨華臺に向つて自動車を走らせました。雨華臺は南京の中心とはかなりの距離を距てゝ居りましたが、私はこの多忙の旅行中に於ては他の若干の名所は犧牲にしても雨華臺へは登つて見なければならぬと豫期して居りました。處が丁度秦淮も莫愁湖も水が溢れて、その風景を味ふ餘地がなかつた爲に、私は城内の盛んに市區改正を行ひつゝある處の町から、從來の狹い細い文字通りの肩摩穀擊の中を

一直線に自動車を走らせて、やがて憧れの地雨華臺へ到着しました。

何故私がこんなに雨華臺といふ處に特に憧れを持つてゐるかと申ますと、私は少年時代から雨華臺で咏んだ高青邱の詩が大好であつたからであります。

大江來從萬山中
山勢盡與江流東
鐘山如龍獨西上
欲破巨浪乘長風
江山相雄不相讓
形勝爭誇天下壯
秦皇空此瘞黃金
隼氣葱葱至今王
我懷欝塞何由開

禍亂初平事休息
從今四海永爲家
不用長江限南北
（これを日本流に書きおろして見ますと）
大江萬山の中より來り
山勢盡く江流と東す
鐘山龍の如く獨り西上
巨浪を破り長風に乗せんとす
江山相雄して相讓らず
形勝爭ひ誇る天下の壯
秦皇空しく此に黄金を瘞めしより
佳氣葱々今に至つて王んなり

酒酣走上城南臺
坐覺蒼茫萬古意
遠自荒烟落日之中來
石頭城下濤聲怒
武騎千群誰敢渡
黄旗入洛竟何祥
鐵鎖横江未爲固
前三國後六朝
草生宮闕何蕭蕭
英雄乘時務割據
幾度戰血流寒潮
我今幸逢聖人起南國

我懷慨塞何によつて開かん
酒酣にして走り上る城南の臺
坐ろに覺ふ蒼茫萬古の意
遠く荒烟落日の中より來る
石頭城下濤聲怒る
武騎千群誰か敢て渡る
黄旗洛に入る竟に何の祥ぞ
鐵鎖江に横はる未だ固と爲さず
前三國、後六朝
草、宮闕に生ず何ぞ蕭々たる
英雄時に乘じて割據を務む
幾度か戰血寒潮に流る

我今幸にして聖人の南國に起るに逢ひ
禍亂初めて平いで事休息
今より四海永く家となり
用ひず長江の南北を限ることを

高青邱は盛唐以後一流の詩人であること申すまでもありませんが、同時にこの人には風霜の氣が餘りあつて文學の華を以てするとも志士の骨を蓋ふことは出來ませんでした。特に右の雨華臺の詩の如きは最もよく彼の風骨を表はしたものゝ一つで慷慨、沈痛の意氣抑へんとして抑ふること能はざるものを努めて泰平唱和の氣象を以て咏はんとしてゐる處に彼獨特の風調が存してゐるのでございます。

さて私は雨華臺の下で自動車を捨て、そこから民末の烈士方孝儒の紀念堂を經てもう一歩高い圓丘に登つて眼を恣にしますと、大體の形象は更にこの詩に反くものはありませんが、長江の水が存外全豹を見せないので濤聲怒ると歌はれた石濤城下邊りには僅かに一

水の光るのを見たばかりでありました、この點はもの足りなかつたが、それは時代を經て長江の水流も幾變化したに相違無いから、詩人の誇張とばかりはうけとれますまい。

何にしても、雨華臺で南京城内外の光景を見た情景と感慨は多年愛誦し來つた彼の詩とそむくものではありませんでしたが、今日この場合に立つて見ますと、私は單に遊子として恣に懷古と詩思に耽るだけの事では許されませんでした。即ち特に即今の時勢と照し合せて見ると、數百年以前に咏まれたこの詩が宛然今の支那そのものを諷咏するためによまれたものとしか思はれない事でありました。形象と古人と時事との三拍子がピタリ相合ふこと斯くの如きは吾々放浪の遊子に於ても稀に見る處の遭遇でないといふことはありません。

試みに一度びこの詩を口吟して次に三度びそれを繰返して思ふて見て御覽なさい。前半はこゝの光景を歌つたものであるが、後半に至つては「武騎千群誰れか敢て渡る」と云ひ、「黄旗入洛」といひ、「鐵鎖横江」といひ、「英雄割據」といひ、「戰血流寒潮」と云ひ皆民國革

命前後を歌つたものでないといふことはなく、一轉して「吾今幸逢聖人起南國」と云ふは蔣介石氏あたりに云はせれば適確に孫中山の暗示性を持ち、その自負よりすれば、「禍亂初平事休息」といふ事に於てともかくも中華民國が南京政府の名に於て支那が形式だけでも統一された昨今を歌ふたものでないといふことはなく、「從今四海永爲家」はこれより民國永遠の平和の曙光であり、「不用長江限南北」といふのは、北伐が功を奏して滿蒙の土地までが名目上の統一を得たといふその安心を歌ひ出でたものと見れば愈々以てこの詩が豫め今の南京政府の爲に萬丈の意氣をうたつたものゝやうであるとの感を深くするに堪へられないものがありませう。

さうして見ると同時にまたこの詩を吟味する者が文字に於ては兎も角、その風骨に於て決して融々たる泰平の象を歌ひ得てゐるものでないといふ事を感得せぬものがありませんか、表に壽ほぎながら内は軒昂たる意氣と悲壯なる慷慨を以て充ち滿ちてゐるのであります。誰れか知らん、その詩の中に市に曳かれて腰斬された高青邱その人の數奇な運命が絶

叫されてあることを。

南北統一の名こそ得たれ、今の南京政府の内容そのものは悲壯とも軒昂とも例へ難きものが想像されるのであります、高青邱の詩は所謂詩人の詩ではありません、移し植へれば花となり泉となる歌ではありません、一皮切れば血の出て來る叫びでありました、今の中華民國卽ち南京政府、それは聖人が南國から起つて、天下の禍亂がはじめて平いだ樣にもあり、長江が最早や南北を限ることを撤廢したやうな有樣ではありますけれども、誰れも之こそ根抵ある永久平和の安定と斷定するものはありますまい、却て益々中華民國そのものゝ不安が此の間に醞釀され、增大されつゝあることを見る者が尠なくないと思ひます。

ではまづ私がこの旅行をした時——といつても時々刻々に變化します支那の局面はこの筆を執りつゝある時の有樣を標準としましても、筆を放つ時の變化はどうなるか推し計られない狀態でございますから、これが出版される時の事などは殆んど豫想をさへも許されないのであります。

從來、支那が自分の版圖として置かれたものが、諸外國の爲に頻々として蠶食或は租借せられたといふやうな歷史は暫くこれを措きませう、今の南京政府は孫中山正系の愛弟子である處の蔣介石氏が國政及兵馬の首席の權を握り、中原の諸豪傑は皆影を沒し、閻錫山、馮玉祥は山西の山に隱れて出でず、滿洲の豪張作霖の子息は蔣介石の下に副司令として納まつてゐるが、西南に於ては共產の餘類が絕えず、廣東に新たに新政府が起りましたけれども、大體に於て蔣介石氏を中心とする南京政府によつて統一の勢力は成りつゝあるといつて宜しいでせう。

そこで、あなたの國の政治家の眼は內から外へ向ふの餘裕が出來たやうな形勢は、賀すべきことか賀すべからざることか一種の不思議な現象でありましたが、功名にはやるあなたの國の政治家連がこの機會を見遁さなかつたのもこれ亦幸か不幸かわかりません。

その外といふのは支那に關係を有する世界の所謂强國の事でありますが、その諸强國のうち支那にとつて最も近くして最も强いのは申す迄もなく日本であります。

殊に南京政府の北伐が成功し蔣介石氏が勢力を得、滿蒙の張氏がその配下となるに及んで、日本に對する敵意が漸く露骨になり來つたことは疑ふべくもありません。中華民國の南京政府が兎に角着々として阻害せられた自國の權益を諸外國から取り戻すことに可なりの成功を爲し得たことは事實でありました、さうして最後に來るべき處のものに來りました。それは支那といふものに最も近くして最も強い日本といふ國に觸るべき機會に到着してしまつたのです。

もとより今の民國政府の樹て方には相當の理解と同情と尊敬とを持ち得べき理由は多分にあります、何となれば、清朝亡びて以來今日迄種々の人物が出殁しましたけれども、その革命家としての中心人物は孫中山を以て宗とすることに異議はないのであります、清朝の遺臣の中にも一のどの人物はあつたに相違ないが、革命家は一人もありませんでした、好雄素を多分に持つた袁世凱があり、改革者としては康有爲の如き人物があり、其他幾多

の錚々たる人物もあるにはあつたでせうけれども、北方には革命家は無かつたといつてよろしい、その間に南方の孫中山は本當の革命家であり、その操守に於ても學問經歷に於ても民國革命の第一人者として何人も異議のない處であります、その孫中山の正系のお弟子としての蔣介石氏が、中山を祖としてその理想の下に中華民國を築かんとする努力は異議を挾むべき理由を見出しません、その點は今迄北方に出頭沒頭してゐた處の幾多の勢力に比ぶれば嶄新にして潑溂たるものがあり、兎にも角にも蔣介石の軍勢に向ふ處敵なき勢を示してゐるのは必ずしも兵に於て强いといふのみならず、名分に於て勝れたるものがあることを認めねばなりません、從來日本の一部のうちにはこの點に見損ひをしてゐたものが無いとは云はれますまい、玄人と云はれる者のうちにも、南京政府が斯くまで北伐に成功し、蔣介石の前にちよつと敵を見出せない程にならうことは豫想してゐなかつたと思はれるものが無いではありますまい。近頃別に廣東政府といふものが出來て、これが却つて孫中山の正系であるかの如く云ふものがあるさうですが、それは何れにしましても、今の

支那の中心勢力である南京政府が孫中山崇拜を眞甲に翳して建設を急がんとしてゐる意氣は見遁すことは出來ません。

この點は革命政府の大義名分として非難の挾みようのない所であるが、問題は孫中山の建國の思想そのものゝ檢討とそれを實行せんとする現政府の手段方法とであります、そこで當然孫中山の革命理想、それから所謂三民主義といふものに一わたり亘つて見なければならない事になります。

支那革命の根本經典を成す所の孫文氏の三民主義及び建國方略、建國大綱に就て見ますと、大體に於て三民主義卽ち一には民族主義によつて民族解放を主張し、支那に於て一民族の專制を排し、所謂五族共和の下に支那を大成せしめんとするもの、二に民權主義は孫文が創意と稱してゐる五權分立の實行によつて古來の因襲と弱點を打破せんとするもの、民生主義には多分の社會主義要素が含まれてゐること、建國の大綱としては最初には軍政の時機、それより訓政、憲政の三期に分けて進まんとし、その方略としては心理建設、物

質建設、社會建設等の三部門によつて進む等、一見してその體裁內容は整々たる組織的に出來てゐるやうでありまして、孫文氏が稱して「行フハ易ク知ル事ハ難シ」の逆說を用ひてゐる抱負も看取するに難からぬものがあります、その理想と實行方式を現在の支那といふものを基礎として見る時は如何にも淸新壯大であるかのやうに見えますけれど、その議論の立て方のあやが離れて見ますと、第一、その民族主義といふ、民族の字面も意義も甚だ解せないものがあります、これは大和民族とか、ラテン民族とか、チュートン族とか云つたやうな比較的輪廓の明らかな意義とも違ひ、モンゴリアンとか黃色人種とか云ふなら格別、支那民族といふ事が實に難かしいものであります、大體に於てあなた方さへ認める滿、漢、蒙古、回々、西藏等が一概に支那民族と呼ぶことに於て完全に統一されるとも包容されるとも見るものはありますまい、古來あなたの國は江河の間を中國とし、その他は大抵東夷南蠻、北狄、西戎等をもつて稱してゐたのでありまして、歷史に於ても決して一貫した支那民族といふものはないのであります、假りに歷史上の版圖の內にこの五民族

が存在してゐたからといつて、それを支那民族として總稱するのは甚だおかしなものであります、又支那民族と假りにあなた方が總稱して見た所で、それ〴〵の民族が何處迄各々歩調を共にして來てゐるか、また必然的に將來歩調を共にすべき共通の血脈を持つてゐることか、又假りに歩調を共にして見た所で、誰れがその統一的治安に責任が持てるか、所謂三民主義としての民族主義が示す支那民族といふものゝ內容の不明瞭なのはこの類でありませう。

それから民權といふことも亦隨分問題であります、孫文氏の理想として支那の國家の政權を完全に人民の手に治めるなどゝいふことは、これは雲に掛橋して登るやうなものでありまして、日本の如き纏りの早い單純な國民性でありましても議會政治とか、憲政とか、代議とかいふことの効果については茫然自失の形なのであります。四箇の民權がどうの五權の分立がどうのといふことは學說の組織的には立派なものでありましても、實現は夢以上と云はなければなりますまい、民生主義に至つては孫文氏も結論に達しないうちに死んで

了つたといふことでありますが、これは勿論社會主義的思想を多く含むものであるが、現在の支那はまだ資本時代にも達してゐない爲に流石のソビエットロシヤも手のつけやうがないと呆れかへつた程ですから、實際として論外のことに置き、たゞ、三民主義の實行方法を確定したといはれる建國大綱のうちの順序として漸く今軍政時代に達し、蔣石介氏が漸くその髣髴を得たといふ時代に止まつてゐるのでありませう。

これを要するに三民主義といふものは、歐羅巴大戰爭が生んだ副產物としてのマルクスを宗とするソビエットロシアが世界に向つて宣傳するやうな意味のインタナショナルの性質のものではなく、たゞ支那の國の結合を鞏固にし、その國勢を盛んにして、さうしてどうかして必死になつて世界の列强の處迄漕ぎつけたいといふだけのものなのであります、自分の國がこんなではたまらないから早く人並の國になりたい或は人並以上になりたいといふだけのものであります、我國を建設することが新時代の使命であり、行き詰れる舊國への弔鐘であり同時に來るべき時代の告知者であるといふ意味もなければ、又一層成吉斯

汗の如く時代や粉飾を眼中に置かず、我が力を以て歐羅巴大陸を震動せしむることは神の使命であるといふやうな英雄的氣魄が存するといふわけでもなく、どうかして自分の國を世界並にしたい〳〵といふ誠に普通な穩健な、惡くいへば陳套な建國意識をやゝ嶄新に組織的に說明したのに過ぎないといふことが出來ませう。

併し、何にしてもその方針と目的とは惡いことではありません、殊にこれに向つて進まんとする新進支那人の意氣は敬愛すべきものを認めずには居られませんが、こゝにその意氣に附隨してあまり理想的民國を作らうとしながら却つて帝國主義的國家のお仲間入をすることに焦り、國際上に不平等を憤慨しながら、國民的に平等の教養を少しもしてゐないといふことの矛盾と撞着と悲慘なる滑稽、これが自國を苦しめ、世界を暗くさす最も大なるあなた方の根本病源であることだけは內外自他共に見遁しのならない事です。

上述の如く、孫中山の理想は、要するに支那を革命し、支那を安全にし、支那を鞏固

にし、支那に新生命を吹き込むといふことの以外には無いのであります、舊來の國家主義思想の外には少しも出てゐないのであります、それにも拘らず、「打倒帝國主義」があなた方の政治家の口から極力叫ばれるのは解せないことの至りではございませんか、現代世界强國に於て、代表的帝國といふのはたつた二つ、英國と日本のみといつてよろしい、歐洲大戰以前ならば知らぬこと、今日に至つても帝國主義のお化を見て怖れるのは點けつ放しにした電燈を怖れるのと同じことであるが、今日も尙支那國民がこの「打倒帝國」を口にして、帝國の文字に向つて吠え立てるのは畢竟するに日本といふもの影に對する恐怖心憎惡心の變形ではありますまいか。

固より日本は帝國であります、日本の帝國である地位は英國の帝國である他位よりもつと不動のものであつて、これは日本が亡びない限り存する萬國絕倫の國體でありますから、帝國の文字がお氣に召さうとも召すまいとも、日本の之を戴ける立脚は何物を以てしても替へることの出來ない歷史的約束なのです。そこで日本帝國の存在が帝國主義そのも

の丶存在だとすれば「打倒帝國主義」を叫ぶあなた方は徹頭徹尾日本を亡ぼしてしまはなければ止まないといふやうな暗示にも聞えないではありませんが、必らずしもさういふ下心ではありますまい、あなた方が帝國主義を呪ふのは、帝國そのものが惡いのではなく、曾て世界の帝國が勢力を競ふて自國へ食ひ込んで來た歴史を見て、その獰猛ぶりに怖れをなした所以のものでありませう、帝國主義とは何ぞ、世界のうちに帝國といふ國體を打ち立て、その國體によつて自ら成長し、同時に世界と協和し、交渉し、世界より受けもし與へもして行かうとすることの存在ならば、誰れかその帝國主義であり民主主義であることに非難を入れるものがあらう、帝國主義を帝國主義として恐るゝのは、自家の帝國を以て世界に於ける優秀なるものとし、その力を以て自己を擴大し、その自己擴大の前には他を犧牲にすることを厭はず、而してその自己擴大の力としては陰に陽に軍備を擴張し、さうして壓倒的侵略的に政策を進めて行かうとするその主義方針の實現を怖るゝのでありませう。

さういふ意味でいへば、帝國主義といふ文字の實質は皇帝を戴いた帝國主義に限つたことはなく、如何なる政體の國に於ても、自己中心の國は皆帝國主義といふことが出來ます、所謂帝國主義は歐羅巴大戰に於て、獨逸が敗れた時既に一段落を告げたのでありますが、帝國主義そのものゝ實質は何れの國にも殘つて居らないといふ處はありません、現在では國家といふものゝ成立そのものが帝國主義的要素なくしては立ち行かないものであると同時に、この帝國主義要素の爲に世界各國がどの位苦しんでゐるかは想像の外であります、支那の國の方々は强國の仲間入をしやうとあせつて居られる一方にその强國そのものが無限に苦しみつゝあることの事實を、お見のがしになつてはなりますまい、年々開かれる處の軍縮會議とか、國際聯盟とか或は不戰條約とかいふようなものは、この帝國主義的國家の苦しみつゝある一つのうめき聲と見てよろしい、世界の總ての國民が、强國といはれゝば云はれる國程に自分の國を成立せしめる所の負擔に苦しみ喘いでゐることは確然たる事實なのであります、今や世界の國家といふ國家は國家そのものゝ成立存續の爲に苦し

んでゐることは、隱すことの出來ない事實であるが、さうかといつてこの苦しみの爲に國家を解體するなんぞといふことが出來るわけのものではない、さりとてまたその苦しみを持つて行つて捨て場といふものがあるべき筈のものでもない、個人ならばまた何かと解脫捨身にして更生する道もあらうものを、國としては古くして强ければ强い程、大なれば大なる程皆この重荷を脊負ひころがしつゝ自ら喘ぎ苦しんで如何ともすることが出來ない、これは國家といふものが持つ免れんとして免れられない歷史の因緣であります、曾て國民を保育した國家の組織が漸く國民を苦しめつゝ行く、この免れんとして免れられない多年の歷史的因緣、そのものが過去の歷史からは身輕に、たとへば番頭だの小僧だの、お得意だの新家だのといつて舊式の諸かゝりに持ち切れなくなつてゐる老鋪が、それでものれんと取引だけは存在の必要の爲に、四苦八苦しても身上を張つて行かねばならぬ苦しい時代、この時に當つて、革命の途上にあつて新たに新國家を創造し得るの立場に置かれた支那國民はよく時勢を察して、從來の國家が總て苦しみつゝある處の重荷を自ら負はないよ

うに子孫にも負はせないように、さうして舊來の重荷に喘ぎ苦しむ他の國家をして新進の自由を眼のあたり實物教授をして見せる位の便宜と特權とが充分に有り得べき筈ではありませんか。

然るに新生の中華民國はどうでせう、不幸が幸をなして、さういふ自由なる出發點を與へられてゐながら、好んで舊來の國家が積年の因習によりて喘ぎ苦しみながらも尙捨てることが出來ないで脊負ひ込んでゐるものを自分も進んで仲間入をしてその重荷を擔がうとしてゐる、孫中山の三民主義といふと雖も要するにそれです、蔣介石氏は軍隊を强くし、國權を明瞭にし、中華民國を世界の競爭場裡に提出して、世間並の國家と足並み揃へさせやうとして苦心してゐる。假りにそれが成功し得た處で、英國であり日本であることの或は米國であることの似て非なる變形である以上以外の何者でもありますまい。

この當代の支那の政治家諸君の稚氣の爲に支那國民諸君が苦しみ、隣國の吾々國民が苦しみ、惹いては世界が皆不安に陷つてゐることを如何に御覽になりますか。

事實帝國主義を打倒せんとする現代支那の諸君のやり方程帝國主義の發露は現代の世界の何れにも無いのであります、前にも云ふ通り今度の行中私が民國の首都南京の市中へ入つて見て、そこでまづ驚かされたのは孫中山を祀る處の中山陵の規模でありました。もとより孫中山は人傑には相違ないとしても、斯うまで祀り上げられるといふことはその素志ではありますまい、また支那の當代の國民のうちこれ程に中山を德としてゐる者が事實幾人あり、又德を慕ふにしてからが、内憂外患でかなり疲弊してゐる國力をもつて一個人の墳墓の爲にかゝる大土木を起すことの不急千萬なることは識者を待たずとも分明な點でありますが、これぞ今の常路者の帝國主義的政略、卽ち人心收攬の術の犧牲でなくして何でありませう、固より支那は國が大きいだけに古來人間の仕事もなか〳〵大規模な點はありまして、例へば萬里の長城を築き、天津抗州間の運河を開く等の現存せるものを除いても、總て土木が大仕掛けであるから、その點は國民性の一つと見做してよからうけれどもそれも時と場合です。南京政府は斯うして新建國の中心を孫中山に置き、それから割り出

して新建國の規模を整へようとしてゐる。それは新らしいやうであるが悉く古い遺り方で今まで歴朝相起つた帝國主義の型と少しも變つたことがありません、孫中山正系のお弟子と呼ばれる蔣介石氏が今政府を代表的に假りに總統とか、元首とかの名を避けてゐるけれども、その主權を握つてゐるといふことの理由はその手に兵力を握つてゐるからであります、手塩にかけて養成した手兵を中心に兵權を握ることに獨特の手腕をもつてゐることが最大の理由であり、たとへ、それは建國大綱のうちの軍政時代に過ぎないといふ辯解はありとしても、その行き方は帝國主義以外の何者でもありません、さうして、この假面せる新帝國主義の民國が蔣介石氏の手によつて、兎も角も成功を示し來る所に、日本軍の山東出兵等は甚だ不手際であつて、内外の輿論を自失せしむる價値があり、滿蒙の陰に虎視耽々たる日本も、世界の感情を顧慮して手出しのキッカケにあぐねてゐる、これが日本奉天事變の以前の支那の小康時代と見れば見られ、そこで、南京政府及蔣介石氏は天下の事略ぼ定れりと、自己の力に過信を置き過ぎたのではないか、南京政府並に蔣介石氏その人の

心事及びその實力に對する過信增長から來る知らず識らずの心奢り――そこに、取り返しのつかない誤過は無かつたか。

この際に於て、蔣介石氏が本當に不世出の大きな英雄であるか、或は全く鋭敏に頭腦が働く人であつたならば――と想到せざるを得ない、不幸にして吾々の見る處では蔣介石氏の過信せる實力はその支那を對象としての實力であり、その新らしい頭腦と信じてゐる處のものは、孫中山メッキであり、中山その者の根本思想もやはりたゞ傳統支那の帝國主義の範圍を出でないことを知ると共に私は支那の政治家諸君が新建を標榜しながらその理想も方針も最も陳腐にして且最惡なる支那の傳統政略の以外を一歩も出でゝゐないことを悲しまずにはゐられませんでした。

支那はまことに宣傳の國であり、この點に於ては天才があるといつても宜しいかと思ひます、私はホンの素通りしたゞけの支那の各所に於て、到る所に貼られた宣傳スローガンを見ました。當時のノートを繰りひろげて見ると、

壁といふ壁、門といふ門、辻といふ辻には日本に對する極度の憎惡と侮辱とを加へた文字の掲揚されてゐない處は無い、自已の惡い所は少しも顧みるの色なく、國を擧げて日本を憎ましむるやうに全努力をあげてゐる。これは單純なる國際感情の行きがゝりのみがさうさせるのではなく、その間に政策があるからである。この政策が支那を誤まり、人類の平和をあやまつてゐるのである。

それからまた感想を書き連ねたものを取り出して見ますと、多少重復してゐるかも知れませんが、

中山を宗として、新政府が新しき支那を建設せんとする意氣はよろしい、同時にその欠點も其處にあるのだ、一にも中華、二にも中華、今の民國政府は何事を措いても支那を統一し、それから後は第二第三といふ焦慮が眼に見え過ぎてゐる。他の帝國主義を打倒し、自ら不平等條約を徹廢し、取り敢へず全支那を固めて置いて、然して後に新支那を作らうとしてゐる。これも亦その意氣を非なりとする理由はないが、その根本的誤謬

も亦其處に存することを痛感する。

自省無し

この國民的統一の方便として彼等は極力他國を憎惡せしむることを自國民に教へてゐる。昔の怨痕を數へ、今の横暴を並べ、古來自分の國と稱せられたる境域の上に他國が來つて加へた、一切の干渉は悉くこれを數へ、これを記臆せしめて、自國民の復讐心に訴へやうとしてゐる。それが爲に有んかぎりの文字を盡して、宣傳を試みてゐる、さうして自己の國の多慾怠慢無力にそれが原因してゐるといふ部分の自省は少しも教へてゐない、實に奇怪である。奇怪といふよりは醜態である。自分自身の汚辱を自分自身で曝らして、それで自分の國を救はうとは驚き入つた政策ではないか。

德を忘る

昔、吳といふ國と越といふ國では、深い怨みがあつて、その國王が薪に臥し、膽を嘗め、朝夕その怨みを忘れざらんが爲に努めたといふ話であるが、それは二千年前の支那の話。それを今の支那國民は繰返してゐるのである。一方から云へば、國民の神經が遲鈍なるが故に、さうまでして油斷なく刺戟を加へてゐなければ持てないかも知れない、他の德を少しも思はずして、その怨みのみを記憶せんとする國、記憶せしめんとする政府と國民が大きくなれたら物の不思議ではないか。

帝國主義以上の帝國

斯う云ふ國民性を改造することを知らないで、大國民が出來上るものかどうか、大統一が成功するものかどうか、事は却つて愈々逆に出るのが定則である。若し又假りに左

様な行き方で、統一が出來上り、國家の基礎が鞏固になつて見たとしたならば、さ様な國家の存在は、今日の所謂帝國主義の國家の存在に幾十倍する危險なる國家の出現ではないか。帝國主義を打倒せよと叫びつゝある支那が、帝國主義以上の危險なる國家を作ることに急いでゐる有樣は現世紀の是れも大きな謎である。（後略）

如何に新政府をつくり、新知識を取り入れたからとてその本質的國民性の長短に反省を施さない限り、それは忽ち剝落する粉飾のみであります。今日支那人がその境域の大國たるに似合はしからず小策を弄するの癖がついてゐるのは蓋し今日に初まつたのではなく、遠く春秋、戰國時代の余風が染み込んで拔けないのに相違ないと思ひます。あの時分に各々諸侯が分立し、群雄割據の態でありました爲に樣々の說客が流行しました。

何分にも廣い國土の中に前後左右に出沒する各々の國を持て居りました時代の處世法として干弓を以て戰ふよりは、折衝を以て爭ふことが有利となりました、そこで「遠交近攻」とか「合從連衡」とか「以夷制夷」とかいふやうな策略が諸國に流行し、さうして口舌の

策士が橫行するやうになり、その余風が亂世といふ亂世に必ず現はれ來つた狀態であります、さうして今日に至つてその病が愈々膏肓に入り拔き差のならぬ惡い國民性に影響を與へてゐるのでありませう。

それは日本に於ても戰國時代といふものはありましたけれども、その間から決して口舌の雄は生れて來ませんでした、これは國民性の相違のみではなく一に地勢の如何にあり日本は地勢の關係上口舌よりは端的に武力で行き得る特色が備つてゐた所以かも知れませんが、これが爲に支那は宣傳の國となり日本は武力の國となつた歷史は興味あるものであります。

近代に於ても支那の外交策として、「遠交近攻」「以夷制夷」の陳腐にして卑怯なる策略が思ひ切つて露骨に行はるゝのは笑止とも慨嘆とも申しようの無いものであります。一國と事端を構へる際に於て必ず急遽として他の一國に好意を示し、それを索制策に利用せんと

する政策が余りに見え透いて余りに子供らしく或は餘りに白々しく折角の好策も斯う屢々繰返されてはもはや誰れも乘手があるまいと思はれる程ではあるが、ある程度まではやつぱりこれが成功する、明治二十七八年の日清戰役以後にしてからが或は日本に好意を寄せ或はロシヤを誘ひロシヤが日本に傷められたと見た時は更に急遽としてアメリカに渡りをつけて日本を脅威しようとする、一時はその手に乘る者も無いでは無からうが、さ樣な見え透いた手管に乘つて余計な怨みを他國に結ばうとする愚か者がさう〳〵あり得る筈はありますまい、袁世凱氏の時代に、唐紹儀氏をアメリカ大使として派遣する途次日本に立寄らしめて隨分思ひきつた露骨な見せつけ振りをして行つたが、肝腎のアメリカへ行けば先方はそれ程熱心にお相手をしなかつたのにテレ切つたことがありました。またこんどの日支問題にしても遽しく聯盟へ持ち出して聯盟の力で日本を威壓しようとかゝつてゐる態度は又しても支那の常套とは云ひながら獨立國の體面として見て居られない行き方であらうと思ひます。

斯ういふ見せつけ振りといふやうなことは人間同志に於ても極く教養の卑い、日本で云へば折助とか裏店社會といつたやうな處に流行するものでありまして、一國と一國との間にいつまでそんな淺薄な策略が通用するものですか、あなたの國の春秋戰國時代はそれも亦一つの變通手段ではありましたらうけれども、さういふ策略をもつて永久に榮えた國は一つもないのであります。つまり實力をもつて立たずして策略であやなさうとし、自力をもつてせずして權邊を賴らうとする惡ひ癖、これもあなたの國の病疾であることを考へて政治家も國民もこの輕薄な病を根本的に癒してかゝらない限り本當の內治外交は定まるまいと思ひます。

今の世界の形勢はあなたの國の昔の戰國時代とは違ひ、ロシヤにしても亞米利加にしても其他の諸國にしてもさう容易く策に乘るものではありません、策に乘ることがありとすれば、みんなあなた方に利用せられる以上にあなた方を利用してやらうとの腹に違ひありません、成程、その遠交近攻とか以夷制夷とかいふ策法は、一時的には奇功を奏するやう

なこともありませうが、假りに日本を排して亞米利加と握手したとしても、それもその當座だけのもの、愈々彼の國が根を下し始めて來た時には又々騷ぎたてゝそれが排斥に狂奔せねばならぬことが出來上ることは目に見えたようです、どの國でも無條件であなたの國を助けて絶へずダ、ッ子に玩具を買つてやるやうな面倒を見つゞけてゐる國はありますまい。何處の國を賴つて見たとした所で、きつとその後から相當の勘定書をつきつけられるに決つてゐるのであります、これ等は私が申すまでもなく、あなた方はもう十分に味ひもし悟りもしてゐることでございませうけれども、あなた方の國勢が許さないから已むを得ず今日でもその見え透いた政策で一時々々の場當りをとつて行かねばならぬ仕義であると斯ふ申さるれば話は斷へますが、もし反省するの雅量と餘裕に訴へることが出來るとすれば先づ次のやうな事を申上げて見たいと思ひます。

云はせれば各々理屈もありませうし、歴史に遡つて數へたら際限がないことでありませうが、私は反省の責の大部分はあなたの國にあるといふことを世界人の一員として公平に

云つて見たいと思ふのであります。反省といふことが卑屈な意味でなく堂々たる君子と勇者との行ひであることは私が申すまでもなく、あなたの國から生れた儒教が最もよくこれを敎へ、世界の眞理が亦これを證明するものであります。

然らばあなたの國は何を反省すべきか——反省は自己良心のことであつても、他からの刺戟の爲であつても、その勇者の一德たることは失はれない。まづあなたの國は自國の領土の廣大に過ぐるといふことを自省なさらねばなりますまい。領土の大といふことは甚だ結構のことでありまして寧しろそれを自ら慶賀し、他から健羨すべきことでありますが、天惠の存する處には責任が伴はねばならぬ、大領土を有する光榮と比例してそれに相當する責任は免るゝことは出來ません、與へられたる大なる領土を自らの力を以て護持するだけの實力ありや否やといふこと、微力なるものが過大なるものを持つことはその持つもの自身の危險であると共に周圍に居る者の大危險であることを考へる必要がある、支那の國は東半球のうちの最もよき部分を大まかに占有して、その面積に於ても吾々日本の幾十倍

を保有してゐるにもかゝはらず、今のあなたの國の實力がこの廣大なる領土を完全に護持することに堪へられてゐるか否かは、これは議論をするまでもなく、現在の事實が證明してゐるところであります。

門閥の大家が家道振はなくなり家屋敷は抵當になり、山林田畑は日に月に人手に渡り行くといふやうな態たらく、それがあなたの國の今の現狀によく似てゐるのであります、さうしてあなたの國の政治家はどうかしてこの屋臺骨の崩れないうちに持ち應へて行くようにと努力してゐるのでありませう、焦つてゐるのでありませう、然し不幸にしてその努力の方針が間違つて居りました——さういふ際に於ての努力は腐朽した大屋臺骨を必死に支へて苦心焦慮してゐるよりはそれを節約勤儉の道に就いて適度に改善して新たに出直す外は道があるまいのに、事茲に出でず雨が漏り軒が傾き垣根が崩れてゐる家屋敷を四方八方に飛び廻つて暴風雨の中から防がうとしてゐる、それは狂奔すればする程勞多くして功なき仕事であるに相違ありません、

然らば眞にあなたの國を救ひ、人民を助けて行くの道は如何と聞かれると事柄がさ樣に簡單明瞭に御返事の出來る性質のわけではありませんけれども、かりに私をして大膽卒直に申上げることを得せしめていたゞくと、「先づ國家を作らずして國民を作れ」斯う云ふことを申上げて見たいのでございます、これだけでは如何にも矛盾にして不祥なる意味のやうにとられるかも知れませんが、さうではないのです、

もう少しそれを云ひ替へて見ますと

「國家を作ることを先きとせずして、國民を作ることを第一とせよ」

と申上げて見たいのであります、

若しこれが日本であるとか英國であるとか云ふ既に國家の體裁を完備してゐる國にはこんな事を云ひ得られる道理はありませんけれども、現在國家といふ形骸が體をなしてゐないあなたの國に向つては最も云ひ易いことで、且つ最も賢明なる進言の仕方ではないかと考へてゐるのであります、もう少しクドくこれを云ひ替へて見ますと、既に堅牢な

家屋を持つてゐる人に向つては家の修理や修繕を進言する必要はないが、既に崩れかゝつてゐる家を持つてゐる人に向つては遠慮會釋なく再建の設計構圖を申上げても非禮にはあたらないのみならず、又最も舊例を追はざる新創意を慫慂致し得る所以なのでございます、あなた方は最早やその家の修理修繕は斷念なさつて、さうして根本的に新らしい意匠と設計とに向はなければならないのでございませう。併しそれならば最早や疾うの昔に今の民國政府がそれをやつてゐるではないか、全力を盡してそれを志し、或は半ば以上成功しつゝあるではないかと云はれるかも知れませんけれども、民國政府の爲す所は前に申上げた通り一見は壯大らしいがその實支那といふものゝ根本的再建ではなくして修理修繕に過ぎないのみならず、その修理修繕が何の名目を以てしやうとも、舊來の腐つた帝國主義の型を追ひつゝあるに過ぎないと思ひます、袁世凱氏あたりはこの屋臺骨の上を塗り隱し或は塗り替へようとしたのでありますが、今の南京政府はたゞその屋根を文化瓦にし壁をシックイにしようといふてゐる丈のもので、既に腐敗してゐる支那の舊國家の土臺

材木、構圖に就ては少しも手を觸れないでそのまゝ押して行かうとするのであります、ですから私はどう考へても南京政府が今の遣り方で支那を生かすといふことは出來ないと思ひます、それが出來ないと同時に近づけば近づく程苦しみと難儀が續出して來るのを考へずには居られません。そこで又前に戻つて然らば如何なる內容の下に支那を再建すべきかといふ具體案の答辯になるのでございますが、その答案として、やはり前言を繰返さなければなりません、「先づ國民を生かして併して後に國家を生かせ」と。

然らば如何にして國民を生かすべきか、國家が强くなくして國民だけが强く生きることが出來るかどうか、さういふ疑問が當然湧いて來なければなりません、如何に國民を生かさうとしても國力が弱くして朝に夕べに隣國から租借侵略の憂き目に遭ひながらそれでどうして國民だけが强くなり得らるゝか——といふ疑問が眞向からのしかゝつて來られるやうに見えますが、これは極めて難題のやうで實は極めて簡單明確に立證的に解決せられる事が不思議と思ふばかりであります、事實國家は弱くとも國民として强くあり得られるそ

の實例は世界の他の國にもありませうが、あなたの國の現在の國民力が又最もよくそれを證明しつゝあるのではありませんか。

國が亡んで何の國民がある、亡國の憂目を見つゝ屈辱に生きてゐる國民の悲境、それを絶叫する志士仁人達の心、殊にあなたの國は非趙悲歌の士といふやうな意味で、それが詩化され美化される程に亡國の痛嘆を味はされてゐる國柄でありますが、それと又一方には國家の興亡、權力の盛衰などに一向無頓著にして帝力何ぞ我にあらんと生きる者は生き、近代的には國家のお世話にならずに怖るべき生活的發展を以て海外に雄飛するあなたの國民力、生活力の旺盛を現に世界が見て驚き脅やかされつゝあるのであります。

再びこゝに世界の近代國家の惱みといふものをよく見て御覽なさい、國家といふものは曾て國民を保護しました、人間は國家といふものを作らずしてはそれらの生命財産の安全が保證せられませんでした、それが爲に國家と個人とはよく結びついて、國家を強くしなければ個人も生きられず、個人はよく生きることに依て國家を強くもし富ましもすること

が出來て、今日のそれらの諸強國を作つたのでありますが、その諸強國が今は既に行く處まで行き盡して了ひ、國家の存在の爲に國民を苦しめねばならなくなりつゝあります、曾つて國家なしに國民は生命財産の安全が保證せられませんでしたけれども、今や國家の存立の爲に國民の生命財産が漸く脅かされんとするの狀態に世間が進みつゝあるのではありませんか、これが卽ち近代のマルクスやソヴエットが跋扈する所以の有力なる一つの理由であります、特に僻んで見るわけでも何でもありません、事實が昭々明々として斯く進み行くのであります、過ぐる歐羅巴大戰爭を御覽なさい、歐羅巴諸國は各々その國家を生かさんが爲に、三千萬の犧牲者と四千億の財産を僅か五ケ年未滿の間に蕩盡してしまつた、世界はあなたの國を亂國と行てその國民の生命財産の危險を慮りますけれども未だ曾て、數年間位にこれだけの人命を殺しこれだけの財産をフイにするやうな素晴らしい非文明な行爲をなしたことはございますまい、これだけを思へばどちらが文明でどちらが未開だか分つたものではないのであります。

歐羅巴大陸では、左程の大犧牲を拂ひ、大非文明事を行ひ、それでなほ將來の平和が永久に保證されたかといふに決してさうではありません、今こそ疲れが癒えないで又も戰爭を繰返さうとはしてゐないが、國家存立の暗闘と悲劇とは各々深刻に常食としてゐるのみならず、大戰爭の副産物として、ソビエットロシャといふ全く毛色の變つた國と亞米利加合衆國といふ古今未曾有の大成金國を拵へてしまいました、さうしてこの二つが國家存立の脅威を他の國に齎すことは如何に非常なるものでございませう、若し歐洲大戰爭の時に、獨逸側の軍國主義が勝を占めたとしたならばそれと呼應して日本の帝國主義といふものが世界の脅威となつたかもしれませんが、日本の軍國主義なるものは（若しさう呼ふべきものがあるならば）戰爭後のデモクラシーの風潮の前に一時閉塞して今日に至りましたから、さしてこれは脅威とは見做されて居りませんでした、現今世界の脅威は矢張りソビエットの新組織と、亞米利加の金力の外はありますまい。

兎にも角にも異常なる國家といふのが出來れば出來る程他の國家は脅威されて行くので

あります、それの目標につれてそれ〴〵の國家は競爭の道を走らせられなければなりませんん、今日の文明國といふ文明國が如何に國防の爲にその國の財力を使はせられ、それに準ずる租稅の爲に誅求せられ、その政府としても各々特殊の國を除いては各々窮乏と不足を訴へて惱ませられないのはないのであります、歐羅巴大戰後間もなく國際聯盟といふものが產れました、その目的とする所は要するに國と國との間の戰爭といふものを調節し或は絕滅しようとする點にあるのでありませう、不戰條約といふやうなものも亦それでありませう、それ等の機關によつて年々繰返される所の軍縮會議はいづれも必死となつて世界の國家をこの國防と戰爭とから救はうとか、免がれしめようとかする努力の現はれでないものはありますまい、これは實に尊敬すべき企てどもあり、又同情すべき動機でもあるに相違ないが、さ樣な盟約或は會議によつて人類の傾かんとする大潮流が防ぎ得られるとすればこれに越した幸はありませんけれども、今日の國家の組織といふものをその儘にして置いて、さうして國際關係だけを調節しようとしてもそれは甚だしい徒勞でなければ、只お

つとめ有志の空論に過ぎないものでありませう。

國家の成立とその國際關係の歴史を研究せずして、單に國際關係だけの、その場〳〵の出來事を裁判顔に振舞ふといふやうな事が出來れば仔細ないことであります、國家の裁判官が犯罪者を裁判して被害者に賠償を取つてやり加害者を牢へブチ込むといふやうに簡單明瞭に處分出來れば文句はありますまい、今日の國際關係と云ふものは、そんなに御都合よくは出來てゐないのであります、況してや人民をさばく裁判官と雖も罪はさばくにしても罪の起ることを絶滅させる手段は無いのであります、若し國際聯盟とか軍縮會議とかいふものが、眞に平和を希望するならば超國家政治の立場にゐる人が、一方に威力を持ち各各の國家の成長と健康と歴史と因縁とを詳しく研究して、そして後に匕を加減しなければならないことであります。

私は最近「國際聯盟」について次のやうな意見を書きました。

聯盟の印象

偶然古い日記が手に觸れたので開いて見ると、大正九年四月二十四日の處にこんな記事があつた。

國際聯盟協會なるもの開かる。その面ぶれを見るに又しても朝野の名流也。朝野の名流の仕事には飽き果てたり。

當時、どういふ了見でこんな感想を書きつけたか知らないが、記者はその當時の感觸が何となく聯盟といふものに氣に食はない點があつたのだらうと思ふ。さ樣な感情は先入的に今日に於ても殘つてゐるかもしれない。最初から聯盟といふものに冷淡か、ひがみか知れないが好意が持てなかつたものであるらしい。感情といふものは獨斷になり易いが、純粋なものがイヤな感じを與へる例は極めて少ないものである。

御定連の威力

聯盟のツキが惡いといつても記者が人類の平和とその平和に對する努力に向つて、冷淡とひがみを持つてゐるわけでないのは申すまでもない。たゞ國際聯盟といふものに何となくよい感じが持てなかつたものである。斯ういふ感情は何處から起るものであらうか一寸説明し難いものではあるが、或は人類の平和の促進といふやうな精神的の大事業が、たゞその時代に時めく御定連の名前を連ねたゞけのコケおどしで出來るものか出來ないものか、さういふ政略によつて何か人心に當てつけがましいおもひをさせつゝ或る一種の威力を持つて臨まうとする心驕けで、さういふ高尚なる事業に歩を進めるといふ輕薄な態度が幾分癖に障つたやうな微妙な感觸に出ではしなかつたらうかと思はれる。

平和と威壓

平和といふものは人心の問題である。少くとも現はれたる軍事や外交や政治をもつと深く突き進めた處から湧いて來なければならない性質のものである。平和は威壓からもたらさるべきものではない。超人間の謙虚性を基礎とし、人類相愛の宗教心に根ざさなければならないものである。かりにも威壓の色があれば、それは一時の平和を齎し得たとしても、必ず或る時間の後に相當の或は相當以上の反動がある筈のものである。若し當代の名流達が、吾々の立場と吾々の實力とを以てすれば、必や人類の爲に相當の平和を保證すべし、といふやうな思ひ上つた心が、内心にあつて事に當るとすれば、それは實に怖るべきこと戰爭以上である。

兩種の平和論

吾々は平和を愛するものを尊敬する。それが本當に信念から來るものを殊に尊敬する假令その議論は實際に遠くして、理想に走すること多大なるものありとは云へ、その信

念より出でゝ平和を冀ひ、これが爲に健闘するヒーローを無條件に尊敬する。人類の理想の爲に國家の現在を超越して立つ聲は、たとへ擧國一致の際にありとはいへ、その謂はんとする處を云はしめて聽くの雅量があつてよろしい、たゞ吾等の憎むところのものは、平和を表面にして國民を戰爭以上の執拗なる爭鬪に導かんとするもの、或は自己の優越的地位を利用して假面的平和を强要し、却つて深刻なる爭鬪心と復讐心を人類の間に刻みこむ輩である。この二つのものは戰爭を機會として、或は平和を看板として、却つてその一つを助長せしめ、他の一つの權威面目を傷け去るものである。

有害無益

今の國際聯盟といふものに、この惧れはなきか、大ありである。今回の聯盟自身のやり方が最も痛切にそれを暴露する、記者が最初のうちの漠然たるいやな感じが如實にその眞相を暴露して、記者の豫感が邪推でもひがみでもなかつたことを裏書して餘りある

國際聯盟なるものは有名無實であるのみならず、今や有害無益の存在であることを確實に證據立てたといつてよろしい。これは何も國際聯盟の動機及び目的が有害無益といふのではない、その當事者の頭の置き處が間違つてゐるのである。爲し得べきことゝ爲し得べからざる事の區別を知らない爲である、爲すべき事と爲すべからざる事の分界が判らない爲である。

內心の自負

世界の國々のうち何處の國が好奇や醉興で兵を動かしたがるものがあるか。まして今日のやうに世界が愈々國際的になつて行く世の中に、好んで戰爭に近づいて、まゝ子になりたがる馬鹿者があるか。それがさうしなければならぬやうに立ち至るのはよく〳〵のことである。そのよく〳〵の事情を知らないで、一概に吾々代表の名流の威力、壓力——それがたとへ如何なる面目を持つてするにせよ——その壓力、威力を他に加へるこ

とによつて平和に貢献し得べしと、鼻にかけ、或は内心に驕る心を以て、この重大事に當らんとする、そのプライドが笑止千萬である。

無上の喜劇か

何にしてもこんどの國際聯盟會議位變テコのものは無い。さう申しては失禮だが、會員の顔振が大抵型の決つた舊式の政治家で、舊式の頭腦と腕を持てこの難問題を解決しようと焦つてゐるのだ。たゞ舊式だけならよいが、舊式の上に無知識なのだ。日支間の歴史的知識が無い上に、風土の知識が無い。それから隣接國の心理的研究が無い。さういふ連中が寄つてたかつて數千里を隔てた處で鼻を突き合せてこの問題を解釋してつかはさうと力んでゐるのだから、二階から眼藥どころの沙汰ではない。その御相談を世界各國が大騒ぎをやつて神經を上げたり下げたりしてゐることは、見ようによつてはこれ以上の喜劇は無いとも云へる。

見學第一

劈頭第一に日本の代表は斯う云ふことを提議するとよかつた。

「ブリアン様はじめ皆々様、誠實にこの問題を評議してやらうといふ思召がありますならば會議に先立つてまづ日本と支那との實際を見較べていたゞきたい。一度委員諸君に日本と支那を見學していたゞいてその上で萬事の御相談を願はうぢやございませんか」

斯う云ふ提議を出して置いて貰ひたかつた。

二流三流以下

亞米利加に拵らへて貰ひ、拵えた方では自分の都合が惡いからといつて投げ出し、投げ出された方でどうか吾々では威力が足りないから參加していたゞきたいと拜み奉る。こんな不見識は今更繰返すだけ野暮であつて、こんどの國際聯盟が如何に無能にして、

且つ有害の事をも爲すといふことの證明が十分に立つた――これは薄弱なる國際聯盟の爲にはいゝ藥であるかも知れないが、本當の平和を冀ふものゝ威力の機關の爲には多大なる損失であつた。

想へば歐羅巴にも政治家はゐない、ゐないではなからうが現はれたる役者はみんな二流三流以下の舊式政治家で、依然として白人優越の打算のもとに慢心しきつた指導振を見せようとしてゐる、歐羅巴も末だ。

必然の勢

是非を云ふのではない、必死の勢を云ふのである。日本は最早や武力によつての外支那を思ひ知らせることが出來なくなつてゐるのだ。それをしなければ日本は本當に生きられなくなつてゐるのだ。それが何處迄影響するかは知れない。兎に角行く處まで行つてからの事だ。支那の眼覺めるのもそれからのこと、日本の目醒めるのもそれからのこ

と、歐羅巴の目醒めるのもそれからのこと、アメリカの目醒めるのもそれからのこと、遠くから睨みを利かして居られるは御自由であるが、日支のことは日支に任せてお置きなさるがよい、生じい手をお出しなさる時ではない。

それは單に「國際聯盟」といふやうなものと、それに集まる名流連の迷誤のみではありますまい、聯盟が苦しみつゝある處と、迷ひつゝある處とに、やはり現代の强國といふ國家か、すべて苦しみ迷ひつゝある現象を見て取ることが出來るのであります。

それはそれとしまして、現今支那を苦しめつゝあると見なされてゐる、各々の强國が、內容は皆、その國家自身が苦しみつゝあり、益々國民を苦しめる方に向つて行かうとする趨勢は、今日の國家の組織が最早や人民の成長と相添はなくなつて行きつゝある證據ではないか、今日の國家といふものゝ組織形骸のうちに、人民を救はずして、却つて人民を慘苦の底に投げ込む擊縛は無いか、そこを吟味し、國家組織の根本形式に解釋を加なければ、聯盟も普選も軍縮もあつたものではありますまい。

然らば今のそれ〴〵の國家の皆苦しみつゝあるその弊害の源を示せ、國家が國民を救はずして、國民を苦しめることになつてゐる無用の機關とか設備とか制度とかいふものゝ存在を示せ、まづそれを檢討してからかゝらうではないか――といふ叫びが起つたとする、それに吾々は何と答へるか、ソビエットロシアとか、或はマルクス派の社會主義、若くはその他の無政府共產黨の主義者連より云へば、それは極めて委曲明瞭に答辯が出來るでせう、斷じて働くものゝ手に國家的權力を奪ひ返せ、搾取する或は支配する階級を悉く倒して自由なる勞働者の手に奪ひ返せ、人間生活そのものを基礎として生活と勞働とを萬國共通に保證することを第一義として苟もそれを妨ぐる機關は政府であらうとも國家であらうとも容捨なく打ち倒せ、それに就ての實行方法は萬國の勞働者の團結である――と斯ういふやうな風に單純熱烈に叫び渡る處の主義も學問も方法も尙且つ之が實現の標本としてのソビエットロシアといふものゝ如きさへ眼のあたりに現はれてゐるのであります――これは一歩誤ると私が最前申上げた國家を生かさずして國民を生かせといふのと甚だ相似

てゐるやうでありますが、實は非常な相違があるのであります、私のは特にあなたの國に向つて、まづ國民を生かして、次に國家をと申上げたのであつて、國民を生かさんが爲には國家の如何なる組織機關をも破壞絕滅して苦しからずと申上げたのではありません、のみならず私は寧ろより以上に國家を愛し國民的特色を愛するものなればこそ斯樣なパラドックスを申上げたので、人間の生活さへ保證されれば、舊來の如何なる特色も權威も破壞して苦しからずとする唯物的政策には斷じて與するものではありません。

私の考へは、國家は國家でよろしい、假令行き方が間違つてゐやうともゐまいとも行く處へ行くより外はありますまい、又あらせて置いても深く憂ふるに足りない、現今の國家といふものが國民の本當の意志を代表せずして、軍部は軍部のやうに、外交官は外交官のやうに資本家は資本家のやうに政黨は政黨のやうに得手勝手に國際的代表をやつてゐるのだとしても、それはそのまゝやらせて行つて差支がない――差支があつてもなくつても吾々はそれを差止めることは出來ない、よし出來るとしてもそれに使用する力は殆んど全

く徒勞といつてもよろしい、だから國家は國家として行く處に任せて置いてさうして國民は國民として同時に世界人民として平和に相交り、相助けて行く道に進みたい、その道によつてのみ國民同志が救はれ、國民同志が救はれることによつて國家も自からその無用の競爭から救はれねばならなくなるに立ち至ると考へる、世界を平和に救ふ途はそれより外には無いと私は考へてゐる次第でございます、この點に於てあなたの國などは國家といふ體裁こそ薄弱なものでありますけれども、國民の生活力自主力といふものには非凡の力を持つてゐるのでありますから、まづあなた方から、その方針をお執りになることに於て本當に自他共に救はれる道に出でるのではありますまいか。

斯ういふことを云ひ出しますと、これほど必死懸命に努力してさへもこの通りの有樣、それを捨て置いた日には四方八方から襲ひ來る狼に肉身を曝らして見せるやうなもので忽ち骨も殘さず食ひ盡されて了ふであらうと慄え上がりなさるかも知れないが、併しそれは本當の杞憂でございます、人類生活の一方面だけを見過きた杞憂でありまして、決して

その捨身の行が絶滅の因とはならないのみか却つて自他を肥やす所以の道となることは實際日に證明も確信も爲し得る事でございます、あなたの國の上海を英國に提供（といふのも少し誤りがありますが）したことによつて、あなたの國の民生は損をしてゐますか得をしてゐますか、又滿洲を日本及世界の爲に開放したことによつてあなたの國の民生は損をして居りますか得をして居りますか——あり來りの名分を離れてそれを比較吟味して御覽なさい、否比較吟味するまでもなく一目瞭然と看取し得られる處の事實であります、寧ろ大手を擴げて開放すべき處は飽迄開放して見て御覽になつては如何ですか、世界の所謂諸强國とか文明國とかいふものは、あなたの國に亂入して來て何事を爲すか、又爲し得る程度は何程か、あなたの國は自己の力を以て完全に支配し得られるだけの領土に暫く止まつて、そして他の强國或は文明國に爲すまゝを少しやらせた見たらどんなものですか、これは實に放膽とも無抵抗とも云ひやうのない態度であるかも知れませんが、あなたの國はそれを爲し得る國であり、その國民はそれによつて亡びずして却つて生かされつゝある

のではないか、前に云ふ通り國家の體裁を成さずとも、國民としては生活力の溢れてゐるあなたの國が最後の勝利者とならないまでも、無慘の劣敗者として終らない事は目に見る事實が瞭々と證明して居ります。

上海を見まして、私は主として此の意見を印象的に書いて居りますから、統計的には何とも申しませんが、よし上海の實權が英國に有らうとも何處にあらうとも、支那人の上海であるといふ印象は詐ることが出來ません、私は上海の市中に溢れ返るあの支那人の車夫達の光景を見て全く驚歎させられました、裸體跣足で近代都市の中を縱横に馳驅し、十錢廿錢を以て走り廻るあなたの國の車夫を以て上海市中は壓倒されて居りました、これは名譽なる光景ではないと云ふ者があるかも知れませんが、私として見た時には舌を捲かずには居られませんでした、よしそれは盲目的生活の躍動に過ぎないにしても、その生動に比べると上海の近代的歐米都市の粹をつくした市街も建築も物の數ではない、五十餘國とかの異人種を集めてゐるといふ世界の大上海に往來する幾多の新鋭な交通機關も、紳士も

淑女も、この自然野生のまゝに躍動する支那の車夫の活力に比べれば全く影が薄いのです、私は實に上海は英國の上海でもなければ世界の上海でも無い、たしかに支那の車夫の上海であると直觀せずには居られませんでした、恐らくまた支那の實業的活力は、上海の表はれざる處には、これに準ずる根を据えてゐるものがあるに相違ないと思ひました。

滿洲はどうです、日本の勢力範圍と云ひ、日本の經營によつて今日あるを致したことは、申すまでも無いが、その實利を得て恩澤を多分に吸收してゐるのはやはり支那人であることは申すまでもありますまい、國家としては國力を傾けて築き成した日本勢力も、個人としては全く支那に壓倒されて、太刀打が出來ないと云ふことは、日本人自身が看取痛歎してゐる所であります。

南洋方面に於ても亦、管轄は他國にありながら、着々として、實權を占めて行く支那人の努力には、管轄者自身も齒が立たない有樣となつてゐるではありませんか。

この怖るべき實力——これは支那にとつて長所か短所か存じませんが、國としてたより

無ければ、人として強くなるといふ自然のバランスかも知れません、すべてのものは、やはり其の長所に生きるやうになされてゐる、あなたの國民自身はよくそれを知つて居られるやうです。そこで、國民の大多數は、治者なんぞは誰れでもよろしい、自分達の生命財產を比較的よく保護して來れるものでありさへすれば宜しいとの觀念が、おのづから出來上つてゐるやうです。古來、幾多の王朝が代を替へて、あなたの國に興亡したが、あなたの國の亡びないのは、統治と生活と全く拘泥せざる起然性が重きをなしてゐる、今日に於ても、支那の本當に生を樂しまうとする人は、內治の下にあるよりは租界に住むことを理想とし、煽動者があつて壓力を加へざる限り、あなたの國民の大多數は、統治者が誰れであらうと一向それに無頓着であることは、確かにあなたの國の重大なる國民性と認めずには居られないのです、揚子江を上るあなたの國の貨物船は、自身の國の土匪を避けんが爲に、外國の國旗を借りて船上に揭げ、外國の船長を雇うて監督を依賴し、而して實際の賣買營利は自分の手でだん〳〵進めて行くといふやり方、それは揚子江に限つたことはで

なく、あなたの國民はすべて、これを平然として爲し得るやうに養成され來つてゐるのです。

これは、もとより國家の面目といふやうな意味から云へば問題になることではありませんが、たとへば日本の如き歷史と團結とを有する國に於ては、その尺地寸土でも他より侵さるゝ時は、國民一人として生きてはゐないほどに彈反するであらうけれど、日本でなくとも今日、强國を誇るほどの國に於て、その體面と權益とに觸るゝことは一時に生命に觸るゝことでありますけれど、あなたの國民は、自分の國を通行するのに他國の國旗を借りなければならない國、さうして行つても實利を占め得れば滿足し得るやうに養成されてゐる國民——それを悲觀すれば制限ないが、樂觀すれば、これはまた絕大なる一種の力ではありませんか、强國になることは學び得たりとしても、この無關心の國民的性格は、到底養成し得るものではありません。この點に於て、あなたの國民は、企及すべからざる大陸的無關心力を植えつけられてゐる。これは幸か不幸か、不幸が却つて幸を生んだのかわか

らないとしても、これを輕蔑の意味に取る者は近眼者です。これを力として見る時は、怖るべき一種の大なる力であります——。

この絶大なる無關心を利用善導して見たらどんなものですか。

收拾と統一に奔命し、さうして幾年月のうちに當然到り得たとしてからが、今日の日本や英米の亞流に出でないといふ無益徒勞なる帝國主義的近況を一時に拋却して、寧ろ支配と監理との他に任し得べきものは、それ〴〵の特徴のあるものに任せて置いて、その自身の生活力を以て、實利實力を自ら占め行く方針をとつて行つたらどんなものですか。

實利實力といふうちにも、從來の排他と我利とを去り、そこに一層人類的教養を加へて、合理的であり、同時に人間同志相抱擁する處の寛裕なる修養を加へて、さうして進み行くことは出來ない相談ですか、本來人文が未だ開けない古代の歴史にありましては支配者監理者といふものは總てに於て優越者であり、支配せられ監理せられるものは劣敗者のやうな實際になつてゐましたけれども、進み行く時代に於きましては支配者監理者も亦分

業としての一つの職務以外のものではなくなるやうになるに決つて居ります、例へば議會の議長は相當名望手腕ある人でなければならないが、さりとてその議員にはそれより以上の閲歴と手腕德望をもつた大人物が幾らもゐるのであります、それ等の人々と雖も議場へ入る以上は議長の支配監理に從はなければならない、それに從つた處が何等の屈辱でも劣敗でもないやうに、又或る市町村の住民のうちには國家の重臣もあり世界的大人物も居るにしても、その市町村を支配する町村長は尋常一樣の人で少しもさしつかへありません。

斯くて、若しあなたの國の鐵道を管理し役所の事務を執り、銀行を扱ふこと等に於て、他の國の人が勝つて居るならば甘んじてそれに任せて見ることは出來ませんか、租借地を回收するといふやうなことがあなたの國の政府の血みどろになつてやつてゐる仕事のやうですが、寧ろ租借地をうんと開放して競つて他の國にやらせて、自分の國は自分の國民としての特長をもつてそれを利用して行つてはどうですか、その際に決して復讐心を持つことなく、又讓つて而して取るといふそろばん勘定からでもなく、普通の人が普通の職業を

行ふつもりで割り込んで行つてはどうですか、滿洲を日本に管理させることが有利であると見たならば、意地を張らずに日本に任せて見たらどうです、さうした處であなたの國民力はいよ〳〵發展しやうとも決して衰退するものではありません、もしまた、さうして見た上で、日本が愈々增長して、關内も欲しい、北京も取るぞといふことになれば、それが天意人道でない限り侵略的野心の現はれである限り決して世界の人心と天地の法則が許すわけのものではありません。

日本の侵略といふことを怖れたがるのは、これは境地と事件とを直接してゐるあなたの國ばかりではない、もう久しい以前から歐米の方でも杞憂の的でありましたが、現代世界に於てこれほど笑ふべき杞憂はありません、成吉斯汗やナポレオンの頃の侵略といふやうな事が、今後の世界に於いて行はるべき筈のものでなし、また侵略し得た處で、失ふ所は得る處よりか遙かに多いものです、日本が假りに武力のみを以て、滿洲から關内へ、遂に支那の中原を征服し得て見た處で、日本の國民力がそれに伴はなければ、勞多く効少なき

のみならず、世界の嫉視の的となり、國内紛亂の種となり、元も子もない馬鹿々々しさを自から求めるやうなものです。

侵略などといふことは、到底、本氣の沙汰で考へらるべきものではないが、併しながら野心の爲の侵略ではなくて、文明の爲の天職、その天職を天に代つて行ふといふやうな使命を與へられた場合は、また全く別箇なものになつて行くのであります。

これは大にあなたの國に反省していたゞかねばならぬ。今日、地球上の最もよき部分の面積を最も多大に與へられてゐながら、その統治の責を全うすることが出來ない。文明の爲に充分に開發することも出來ないのみならず、これを開發せんとする力を迫害しやうとする、世界人に旅行の自由を與へないのみならず、その自國人すら他國の國旗を借用するにあらざれば旅行を爲し難く、他國の租借地に入るにあらざれば生を樂しむことは出來ないといふやうな國柄。

さういふ處に向つて、他より世界人文の開發の爲に力を加へやうとするものは、それは

侵略ではありません。天に代つて人道を行ふものなので、これは、禪讓放伐の歴史を是認諒解してゐる、あなたの國民は充分納得の行かなければならない點でございます。

侵略は防がなければならないが、開發は拒むべき理由がありません、侵略は私利野心の變形であるが、開發は天が人間の手を以てする使命であります。

誰が、そも〳〵今日の混亂迷夢の支那を開發するか、この場合に於て支那を開發するものは支那との頑張りはもう許されません、支那に英雄が起つて、而して之を爲すか、或は支那民衆が敎養せられて自ら之を爲すか、この二つの問題はもう試驗ずみと云つてさしつかいないのであります。

私は卒直に申したい、支那には最早や英雄が起つてもらいたくない、支那に英雄が起れば起るほど支那の人民は迷惑し、近所も迷惑をするのであります、この點は現代の日本とは全く違ひ、現代の日本には英雄が出てもらいたいけれども出ないのである、然るに支那には次から次と英雄が出たがるし、またその相場のほどはわからないが、それ〳〵の英雄が蹶

をついで出て來てゐるのであります。最近に於ては袁世凱がそれでした、續いて孫逸仙もそれでした、今は蔣介石氏といふことにそれが表示されてゐるやうですけれども、要するにそれ等の英雄は皆、國と人とに煩らひを與へこそすれ、幸を增してはゐないのです。

最近に於ける蔣介石氏の帝國主義が、また立派にあざやかにその型を踏みました、蔣介石氏も豪傑の士ではありませうが、知らず識らず自分と自國の力を過信し過ぎてゐました、どうして一歩支那の內地へ足を踏み入れて見れば、外に向つて虛勢を張ることなどは許されることではありません、その民國政府の標榜する「打倒帝國」とか「不平等條約徹廢」とかいふやうな外に向つて張る虛勢は、內に向つて修めなければならないものが多々あるに拘らず、多少の成功に漫じて、統一氣取り、英雄氣取りで、排外熱を揚げてゐたのが、蔣介石氏とのみ云ふことなく、支那の政治及び政治家の最も大なる誤でありました、もとよりその誤まりはその人達自らといへども、自覺してゐるのかも知れませんが、自覺してゐたとすれば、知りつゝこれを爲すの苦肉の政略でありませう、それが根本の惡いこ

とでした。

重て思ふ、現代の日本には英雄の出てもらいたい時であるが、英雄が出さうにもなし、之に反して、支那は英雄が出てもらいたくないのですが（支那國民の幸福の爲に）それにも拘はらず英雄が出沒して、體のい丶帝國主義を振舞つては、益々國と民とを惱ましてゐるのであります、こ丶の帝國主義といふのは、やはり「打倒帝國」を標榜するそれ自身の政策と「帝國主義」に輪をかけたやり方をやりつ丶民國の名によつて、野心家が横行してゐる支那の現代を云ふので、今の民國革命政府と雖も、その立て方は帝國主義の粹であること繰返すまでもありません。支那の平民諸君よ、つとめて、この野心家に欺かれ給ふなこの種の英雄の煽動に乘りなさるな。

然らば、支那國民諸君は何者によつて生を安んずべきか、地理としては國家的に解體せんとし、而して人としては賴むべき先覺と英雄とを見出し難いとすれば、力として賴むべきは一體何ものか、私が前に申上げたやうにその個人的生活力は以て自ら立つには優れ

たものであるとしても、やはり國家的にはある力を持たなければ人間生活は保證されないことまた私が申すまでもありません、支那及支那國民諸君は、個人の力以外に、纏まつた力として何を賴むべきか、何を相談相手とし長短補修して行くべきか、こ丶に於て、やはり、あなた方は迷ひつ丶ありませう、各々その緣によつて、陰に陽に他強國の力に賴らねばならぬ事の順序をお認めになるかも知れない、實際としても、あなた方の國は、その賴るべき强大な力を絶へず求めて居りました、求めてはゐたけれども、與へられるが如くして與へられないのは、誠意が足らず、洞見が足りない爲だと思ひます、そこで、賴む者も賴まれるものも、今まで一として思はしい結果を見たものはございますまい、最近の「國際聯盟」にしてからが、とう〳〵、日本の勝利とはいへないまでも、あなたの國を最後の失望に置くことは爭へないので、さうなるのが、やはり當然の結果であります、實力なき主張誠意なき信賴は、到底一時の愁訴や宣傳を以て結局如何ともすることは出來ないことを、あなたの國が敎へられたのは今に始まつた事ではないのに、それを再三再四繰り返して覺

らないあなたの國の有識者の心と眼と程不思議なものは無いと申さなければなりません。

私は、全く虚心平氣に、斯ういふ事を斷言して憚かりません。

支那及び支那國民諸君の力として頼むべき、また眞實打ち明け合つての相談相手は、世界のうちに日本を外にしては無いことを、これは手前勝手でも、我田引水でもなく、侵略心の變形、帝國主義の使徒の口吻をかりて斯う申上げるのでもなく、天の時、地の利、人文の歴史、國民性の相違等が、一から十まで、これを敎ふるのであります、私とても今更ら、同文同種だの、日支親善だのといふ、不渡り手形を出して、諸君に笑われやうとする考へはありませんが、要するにあなたの國を危くすれば日本の國を危くし、もしまた日本の國が危ければ、あなたの國はそれこそ骨も殘らず、しやぶり取られてしまう事、これだけの事實は明々にして欺くことが出來ないのであります、唇齒輔車といふも古いが古いながらに、その成句の現はす通りの關係を如何ともし難いのです。

然るに何事でせう、この唯一の友國に向つて、あなたの國は極度の反抗と復讐心を貯へ

てゐる。單に貯へるのみならず、子々孫々までも殘さうとしてゐる。私は決して友國の押賣りをするわけでも何でもありませんが、あなたの國は日本と爭へば爭ふほど損で、日本も亦あなたの國と爭へば爭ふほど强くならなければならない國であります。

日本の國の事については、私は別にまた稿を起して、近來の實際を忌憚なく自省解剖して見るつもりで居りますが、幾多の不滿缺陷はありとしましても全體的には日本は有機的にまとまりのついた國、殊にその國力の發動に於ての軍隊としての强さは、これは、ほとんど全世界に於て絶對者の地位であることを申上げて憚らないのです。

日本の軍隊は强いこと、軍隊としての强さは世界一であらうといふことは、私は、こればかりは自讃の意味でなく事實の觀察、或は證明として確信を以て申し述べてもよろしいと存じます。——日本の軍隊は何故に强いかといふことの歴史的、國民性的證明を、私は立派に之を爲し得るつもりですが、それを爲すには尨然たる大冊を要します。兎に角、日

本人は武術軍力にかけては天才的の素質と、それに加うる規律と鍛練とを持つてゐることは、今も昔も變りはないので、如何なる場合に於ても武力を以て、日本と爭ふことは非常に損であります。單にあなたの國が日本と武力的解決をなすことの不利なるのみならず、今の世界のどの强國と雖も、日本を相手に戰爭をしては損です。たゞに對國家的でなく世界全體を敵としても、事儀によつては日本は戰を辭せぬ位の實力を持つてゐることは、自慢でもなく、辯解でもなく、確かな事實であると確言したい。まして、あなたの國の蔣介石氏あたりが一朝一夕の手兵を以て日本と武力的解決に當らうなどといふことは想像もつかぬ無茶なことであることを憚からず申上げて宜しいと思います。

そこで、爭ふとすれば、當然、戰爭以外の力で爭ふ事の外にないのは、內心もうあなた方の識者は知り盡して居られ、そこで外國への依賴と日貨排斥とお得意の宣傳を以て之に對抗しやとなさるが、外國と雖も、さう〳〵は、あなたの國の實力と誠意を缺く哀訴歎願に乘るものではなく、宣傳と雖も、やはり實力と誠意とを缺く宣傳は、やがて己を傷ける

刃となつて反るに過ぎないことをお悟りにならなければならぬ。日本にも隨分、口先きばかりの宣傳屋はゐるには居ます。實力と誠意を持たぬ者の生き方は、畢には多數を恃むこととその多數をくらます宣傳によるより外はありません。日本にも、さういふやからは近來殊に殖えて來たやうですけれども、要するに日本の國民性は宣傳に拙です。宣傳に拙にして實行に敏であります。沈默寡言にして隱忍し、爲す時は決死以て之を斷行するといふ氣分は、たしかに失はれては居りません。故にあなた方が宣傳を以て勝たんとせらるるもこの國民性だけはよく飲込んでかゝらぬと、その最後の時、國力の發動となつては、もう如何ともすることが出來ません。決して血を見なければ納まらない徹底性を日本の國力は充分に持つてゐるのです。

こゝに於て、あなた方の國に敎へるのは、如何なる場合にも、あなた方は日本の軍隊の御機嫌にさわらぬやうにすることです。と云つても軍隊だけの御機嫌だけを取つて、その

増長を助長せよといふ意味の毛頭ないことは申すまでもありませんが、軍隊以外の日本人はさして怖るゝには足りないのです。と云つて、それを輕蔑してよろしいといふ意味でないことも勿論です。日本の軍隊は怖るべきものだが、その他の日本國民は存外人のよい正直な親しみ易い、また物わかりもよい、時としては卑屈な位に腰も低くなり易い國民だといふことをよく頭に入れて置いていたゞきたい。事實日本内地へ來て御覽になつても、いかなる外國人でもこの國では歡迎され、何處へなりと心置きなく旅行も出來、スポーツだのマーヂャンだのに他愛も無く湧き上がり、亞米利加あたりの本場から見れば子供にも足りない學生達の野球に、大の國民が熱狂して、新聞紙も全體面を之に提供するといつたやうな馬鹿々々しい處もあり、また支那の内地へ入つてゐる日本人を見ましても、少しも自尊や傲慢の風はなく、あなたの國に對しても、寧ろ氣を兼ねて讓つて生きて行くやうな風が見えて、この點は歐羅巴の白人とは大した相違ではないかと思ひます。

私は、どうしても日本人は個人としての獨立自尊性といつたやうなものからは、實に貧

弱な氣質しかないことを殘念ながら認めなければなりません。それと打つて變つて國家としての日本の威力は最も怖るべきものであることを信ぜずには居られません。前者の意味によつて日本人を輕蔑してかゝる時には、やがて後者の威力となります。日本人の長所も此處であり、短所も此處であります。日本はその存在の爲に、この國家的威力を益々精練する必要があると共に、日本國民はこの威力を濫用することを吳々も慎しまなければならないのです、これには日本國民が、もう少し個人性を進展せしめねばならないと共に、外國人にも此の國民性をよく知つて置いていたゞかなければならないのです。

私はこの度の南支から北支への旅路に於て、世界各國の有ゆる人を見ましたけれども、その印象に殘つてゐるのは二つの人種のみでありました。その一つはあなたの國の勞働者、他の一つは日本の國の軍人であつて、これは兩極端の對比でありますが、この二つだけは生きてゐると感激せざるを得ませんでした。即ち支那の勞働者は文明人に使役されながら實は文明人を壓倒してゐる現在の盲目的生活力に溢れてゐる。日本軍人は、將校

より一兵卒に至るまで訓練せられたる武人として、がつしりと充實してゐる。有ゆる內外人も文化的勢力も、この二つの人種を見た眼で見ると、全く影の薄いことを感せずには居られませんでした。

私は支那及び支那國民諸君に痛切に寄語したい。あなた方も我々が信賴する通り日本の軍隊に信賴なさつて見てはいかゝですか。嘗て袁世凱氏は、團匪事件の際に有ゆる强國の兵が集まつた中に、日本軍だけが特に水際立つて優秀なるを看て取り、自分の軍隊をば日本の教官の手に委ねるやうになつたとか聞きましたけれども、袁世凱氏のやうに手兵の教養を任せるといふことを一段徹底せしめて、日本軍その者を無條件に信賴なさつて見たらいかがですか。

こんな事を申上げると、それこそ破天荒、他國の軍隊に自國の治安を一任するといふことと、そこで、面子問題が悲歌慷慨となつて溢れ出して來るかも知れませんが、前述來の私

の所說をよく味つていただいたら、自ら一段と深く省悟さるゝ事がありませう。

日本の內地に於いては、內治に關する限り、今は武力を必要とはしないと申して宜しいでせう。何のかんのといふけれど、日本は警察力だけで充分に治まり、對內的には絕對に兵備はいらないと斷言してよろしいでせう。併し乍ら、あなたの國は、まさにそれと反對で、武力の必要、或は靜止せる武力の威重を必要とすることは內治的に絕對に必要で、國防的には、ほとんど有害無益と云つてよろしいと思ひます。我々は日本に於て軍縮論などを聞いてゐますと、軍人のサーベルが少し長過ぎるといつたやうな皮肉の眼を以て見ることもありますが、あなたの國に於て、わが軍人の姿を見ると一兵卒までが凛々たる守護神の威風を以てかゞやいてゐることをあがめずには居られないのです。それほど、今あなたの國には武力必要の零圍氣があるのです。單に日本軍が存在するといふことだけでも、また單にあなた方が此の日本軍に信賴するといふ心を持つだけでも大した威力だと思はずに居られません。

但、日本軍を信頼する事が國辱だとあなた方が考へるやうでは、まだ私の口を酢くして申上げる微意が少しも分かつておいでにならないと思ひます。それは侵略ではないのです。日本に與へられた國力の天職なのです。日本はこの長所によつて人類としてのあなた方の爲に盡さねばならないのです。小さな國際的感情から見れば何といふか知れないが、これは自然の天職だと私は信じて居ります。日本は此の天職を怠つてはならないやうに、あなたの國はその天職を行うことをさまたげてはならないのです。やはり小さな國際的感情から云はせるとそれは、隨分手前勝手の、イソップにある獅子が羊を喰ふ時の口實のやうなものだと云はれるかも知れない、それは何とでも云はせて置いて、事實に於て見るより仕方が無い。果して、日本軍に信頼することが、あなたの國の大局の治安を害し、生民を損ひ、現在あなたの國が在る以上に惡化せしむる者と見た時は、全力を擧げてこれを彈劾なさるが宜しい。その時こそは、本當に世界の聯盟も總動員して、眞劍にあなたの國を助けるでせうし、また世界聯盟の總動員よりも至大至强なる國家興亡の原理と人類生存の

大義とが日本を許すものではありません。日本軍が强いと雖も、この國家興亡の原理と人類生存の大義を背後に負へばこそ强いので、これを無視して强がり得べき理由はありません。——この點の信仰さへ確立してゐさへすれば、日本の力を信頼することの絶えて危險の無くして、永遠に安全を期し得ることを知り、これが確立せざる以上は、あなたの國はいつまでも小英雄と、割據野心家とに引かきまわされて浮む瀨とてはありますまい。右の正しき意味に於いて、日本が支那を侵略するならば、侵略させて置いたらいかがですか。周も漢も、その他の有ゆる英主は皆その意味での侵略者の資質を持ちました。その意味での侵略を、あなたの國民は皆歡迎し謳歌して參りました。眞に日本にそれだけの力が與へられてゐるとしたならば、周武、漢劉を迎へたやうな心で日本を迎へられないのですか。朔北の元にも淸にも、あなたの國は謳歌してゐたのです。天が德を與へた場合に於いて日本を外にすることは出來ない筈といつても宜しいのでせう、國家を安んずるの力があり、民生を保護するの實がありさへすれば、それを侵略と呼ぶならば、その侵略こそ、いつも、

あなたの國の國民が渇望する所の王道でありませう。この名分は日本の如き國に於いては絶對に通らない名分でありますけれども、あなたの國には融通自由に通し得る大義になつてゐるのであります。これとても毫も手前勝手の理窟ではなく、單に國體の相違に過ぎないのです。日本に於いては他姓に支配せらるゝといふことは想像も許されない事であつて革命は卽ち絶滅を意味しますが、支那に於ては、革命は卽ち生命の變化であり、侵略が救國の手段となつて、少しも矛盾なく國辱なく通り得らるゝ國であります。國體の相違で、何れを是非と申すのではありません。また日本の野心の强辯として之を主張する理由もありません。

この點、言葉を換えて見ると、日本は一定の軌道の上を走つてゐる汽車(火車)であります。あなたの國は無軌道を走つてゐる馬車のやうなもので、わが國は一定の軌道の外には走らない代り、軌道に來つて之に觸るゝものある時は慘憺たる不祥事を惹起するより外はありません。馬車としては何如なる道をも行き得ると共に、汽車に出逢う場合は、馬車の

方から避けねばならないのです。汽車は避けることが出來ない如く、避けしめることも出來ない。日本と支那とが衝突するのは、此の行路の性質がよくわかつてゐないからです。言葉を換へて云へば、馬車が汽車道に引かゝつて汽車の進行を妨害する爲であります。これは今日の滿洲事變の經路を指摘するのではない。あなたの國全體の行方が、いつもさうなつてゐるのをこの度の事變の鍵が、ほとんどあつらへたやうに象徵的にあの事件によつて捲き起されました。

上來、論述する所、期せずして內外に對し無禮に失する點も多いと存じますが、そこは一平民の逸氣としてお許しを願いたい。なほ足らざる所は時と人とを待つて、大いに語りたいと思はないではありませんが、本來、私としては語るよりも樂しみたい。實際、私の心境としては、支那の國土にあこがれきつてゐる、一年に二度も三度も繰り返して、あなたの國に遊ぶつもりでスタートを切りました處が、この度の事變です。

嗚呼、私は眞實、支那に遊びたい、日本の內は、も早や知り盡したとは云はないが、進

んで私の遊意を惹く所は無くなつてしまつた。歐洲邊や亞米利加は大抵想像がつき得るのである。亞弗利加大陸の如きでも文明の發達がトーキーをまで作り我々をして、ほとんど實見するが如き智識を與へて呉れる。ひとり支那だけがわからない。支那の內地が謎となつて解放されてゐない。今の世界に於て、事實解放されてゐない、人類の旅行の自由が奪はれてゐる國は支那だけだと云つてもよい。その癖、三千年來の人文が殘してゐる魅力の豐富なること地球上この地に及ぶものはありますまい。我々は利權を漁らんが爲に支那に行きたいのではない。軍事上の地の利を考へる爲に行くのでもない。學術研究を使命として專門家的に行きたいのでもない。一簑一笠といつたやうな身輕の旅で、この魅力ある國の風物に浸つて、ひとり樂しみたいのだ、ひとり樂しむと共に、衆に向つて、これを傳へたいのだ。その結果が人類相愛の大義と、地上に天物を樂しみ愛するの心を助長する事ともなれば此上の幸である。智識の上で三千年來の豫備を持つ我々、無學短才なる小生等と雖も、三千年來の歷史も文物も相當に心得てゐる。兎も角も、歷史的に養成されてゐる我

々を以て見る支那古國の色彩は、他の云ふに云はれぬ懷しいものを持たぬわけには行かぬ。

僅々三十日の小旅行、ほとんど鼎の一臠を味うたに過ぎない私達のその旅行に於て、それでも不盡の長江の海に注ぐ途方もない洪水を見た。蘇州に吳越の昔を忍び、運河の周遊の奇古莽蒼たる壓迫を悅び、悠々たる水國の間に金山寺の塔が浮ぶのを見ても心が躍り、水は盡く黃なりと信ぜる支那の小兒が、その黃濁水に遊泳嬉戲するを見、黃土、黃水、黃人、黃といふものが支那の國色になつてゐることを偶然ならずと思ひ、黃は人をして喜ばしむるとも悲しむる色でないことを見、未開と雖も數千年の歷史の脊景を有する國土と人民とには、おのづからに相當の氣品が有することを知り、驛々に見る物乞物賣りの徒までが、皆繪になつてゐることを見、地上には村と村とが遠くて、しかも相呼び交はす交會を見、天上には團々として雲の肩を並べて行過ぎる行列を見、獨得の建築、古色そのまゝの城壁——一として我等を悅心駭目せしめぬものは無かつた。その人に就いて云つても、政策的惡宣傳の醜態と、その煽動の零圍氣にある若干の人を除いては、その朴野なる親しみは、

やはり人類の習として我も人も變らない。人を愛して語らんことを希ひ、物を與ふれば無邪氣に狂喜する兒童走卒、各々の勢力範圍に於て、紙幣の流通が自由でない爲に大洋と稱する大銀貨を携帶する、これのみは支那の到る處に喜んで通用されるにより、重量が大變であるにかゝはらず、その二三十枚を用意して到る處に携帶使用し、或はチップとして與ふる毎に、これを受けて喜ぶ人の色を見ると利を思ふに敏といふ感能よりは、その無邪氣なのがたまらなく嬉しくなる。出來るならば幾千萬の大洋を車に積んで、惜氣もなく振まいて歩いたなら、我輩と雖も、とても愉快な成金氣分が味へるだらうなんぞ空想に耽ると——それから、何處へ行つても我々の快感と健羨とを誘發するものは、軒々に掲げられた招牌といはず、華語と云はずの文字である。排外宣傳だけは淺ましいと思つたが、その他に於ては、さすがに文字の國、その文字のうまい事、軒なみの招牌の一つでもいゝから外して日本へ土産に持つて歸りたいと思ふ位、日本人も多年漢字に養育されてゐながら、どうしてあゝも拙いだらう。支那では本場とは云ひながら、書家の字でも何でもない店頭

の看板にすら、どうして斯うも立派な字を惜しげもなく使用し得られるだらう。これを見るにつけ日本へ歸つた時、町並の看板が見てゐられなくなつてしまうだらうといふやうな氣分で、ある時は威壓を感ずるやうに、ある時は涎を流す氣持で、この文字の中を通つて行く。治まらないだけに、整理に過ぎた弊のない處は嬉しく、荒廢は困るが無頓着に却つて自然味の面白さをながめる。荒唐無稽なるその演技曲藝のたぐゐも、見れば見るほど幻怪味があつて、整ひ過ぎた日本の演劇及び設備を見るのとは違つた味がある——さう思つて見れば見るもの聞くものが奇異でないものは無く、しかも、奇異そのものが野蠻地の奇異と違つて數千年特異の文物を裏づけられた奇異なのだから亂離にも相當の厚味があり幅員がある。

大鼎の中の一臠でさへ、すでにこの味がある。今後の內部に殘る測るべからざる荒唐を見たい。長江を溯れるだけ溯つて、巴蜀のあとをさぐる事の興は云はでも、バミール高原を目ざして支那第一の高山を探りたい。(支那第一の高山は何か、大抵の支那の書物で

もわからない。大抵の支那通にたづねてもわからない)。玄弈三藏のあとを近代的に歩いても見たいし、成吉斯汗の馬締の跡を北の方から追ふても見たい。武陵桃源を自ら求め自ら選定して、そこにしばしあとを晦ます事も風流ではないか。

糧をつゝんで、天山をめざし、家を出でゝより月の兩回圓かなるを見るといつたやうな氣分で、ひとり旅路をさまよひ行く事が出來たならば——と自分の心は、今そのあこがれに躍つてゐる。

併し、それも今は全くの空想と謂ふべく、私が先刻歩いて來た僅々たる旅行の行程すらも今は不可能になつてゐる。この後、幾年月を經たならば、完全なる諒解の下に人々その自然の權利として旅行の自由を樂しみ得るやうになれるのか、私としては少しも多きを望まない。天の與へた國土に人間が自由に旅行して、清白なる享樂を全うし得られゝばそれで足りるのである、それが今の支那に許されてゐない事は返す〳〵も人類の爲の最大なる不幸の一つではないか。

せめて、支那の心ある平民諸君よ、國際には國際としての何ものかゞありとも、我々同志は着々として人間同志の光榮ある接觸をつゞけたいものではないか、客を愛する事は人間の美德と敎養の粹である。私はこの心を以て支那及び支那國民諸君の間に友人を求めたいことを切に切に希望する者である。私は今、日本の東京の郊外の閑居で靜かに此の稿を書いてゐる、この靜閑の間に連續的の遠音が聞える。それは某練兵場で鐵砲の試射をしてゐるに違ひない、事變以來、この遠音がしげくなつた。斯樣な物音を繁激にすることは、我國の希望でもあるまい、隣國のよろこびでもあるまい——たゞ我々これ等の威力と、この威力がもたらす犧牲のあまりに痛烈にして高價なることによつて、各々の謙抑の德を痛感するの道より進むを得ないものか知ら、何にしても、國と國との爭ひは、先づ人と人との和らぎを以て救はねばならぬことを事毎に體驗させられる、私は聲の嗄るまで、叫びたい、叫んでさうして、支那及び支那國民の間に、我々の本當の友を求めたい希望で一ばいであります。

日本に歸る汽車中、私は携帶の日本服が綻びた爲に、支那服を着て居りましたが、山陽線の姫路驛で、私が後部の列車から物を買ひに停車場の方に下りて行くと、そこで一人の支那青年が、さも懷かしい面をしながら、私に近づいて來て、頻りに物を言ひかけました、私の服裝によつて直ちに同國人と合點し、ひとり異鄕に來てゐる自分の身のまわりの寂寥から、親しみを私に求めて來たのを見て、私は無量の嬉しさを感じたが、悲しいことに、この青年の親しみに酬ひてやるだけの素養を持ち合はせて居りませんでした、言葉がわからないといふ、こちらの無學の爲に彼の憐情に酬ゆることの出來なかつた國際的不具者の身をつく〳〵殘念に堪へられませんでした。

今や、ほとんど國交斷絶の際にある兩國の間に、國際的の怨恨を知るや知らずや、お互に敵中にあつて、荒涼たる環境のうちに、死の如き憂悶に生きてゐる異鄕同士の人の心となつて相見ると、どうして人類同志斯うまで爭はねばならないか、ひとり異鄕に於て鄕人をなつかしがるあの心を推し廣めて、國と國との間に及ぼすことは出來ないものか。

抑も見やうによつては生存は皆侵略の形を備へてゐないものはありません、さりとて、天が生存の力を與ふる所以の道は偶然ではないのです、人間同志が低く眼をつけて爭鬪してゐる働らきの上には、ズット大きなリズムがあつて、それを然らしめてゐる所以の攝理を靜觀せねばなりません、眼前の事のみを以て悲憤慷慨すれば、それはお互に心臟を破裂せしめ了らずには置かないでせう。

私が僅かなる旅行中に看收し得た事のもう一つは、あなたの國は古來、儒教の國孔子の國であり、現世と雖も荒れ果てゝこそ居れ、孔子廟の規模は、儼然として名教の宗たる偉觀を失はないのであるけれど、其の實あなたの國は儒教の國ではなく、徹頭徹尾老子の國である事です、孔子の名教を以て宗とせんとしたのは、たま〳〵その己れに足らざる處の、無きもの貴しの理であつて、儒教の要諦は日本にこそ來て居れ、支那の國に於ては、その風俗の中にも國民性の間にも、ほとんど見ることは出來ないで、却つて老子の風貌思想精神を隨意に髣髴するといふことは、私ばかりではなく、誰でも相當の眼を以つて見る者に

看取の出來ない處ではありますまい。

老子の道が支那の生き來つた道、生きて行くべき道ではないか、方正なる仁義と、不斷の倫常に終始し席あたゝまらずにつとめてゐた孔夫子も、老子に會しては、その捕捉すべからざる容量に壓倒されて、施さん術を茫然自失してしまつたやうな存在が、支那本來の持ち味で、さうして、所謂世界の列强をも、この點に於て茫然自失せしめる處の本質を支那は持つてゐる、然るにその本質に生きずして、孔子よりもつとずつと末流の覇者權者の道に汲々として生きやうとして、却つてまた一層夷狄の所爲に墮してゐるのではないか、

老子に還れ……といふ事を支那の國の現在で高く叫んで見る者はないか。

爭ひは末であるけれども、爭はんとすれば人は長所を以て爭ふが宜しい、支那が日本と武力を以て爭ふなどは拙中の拙です、さうかといつて、說客の道で爭はうなどゝは底の知れたものです、日本に本質的に絕倫の長所があれば、支那もまた當然それを持たなければなりません、確かに持ちつゝあるのです。古來、三千年の世界の諸强國が、皆ほとんど亡

びてしまつたのに、支那だけは民として、いよ〳〵益々生きつゝあるのは、由來英雄豪傑や覇者權者が出沒攪亂したとはいへ、支那の國民性の本性が老子的であるからに相違ない、時流時流の、小英雄、小政治家、小名敎者流の野心と攪亂と鄕愿に煽動せられて、この悠悠たる大道を失はんとする時に支那の國が不幸です。

國家も人間も、生存せしめらるゝ以上は生存の使命があるに相違ない、使命のある處には爭鬪が無くて、長短相補うの特性があるに相違ない、個人にしても國家にしても、それをよく〳〵自覺し得る時には、血を流し骨を曝らすやうな事はせずに利用厚生の道があることを、私は信じて疑はないものでありますが、悲しいことに、人は靜かにその自覺を求めるの餘裕が無い處へ、煽動の野心家が出て來て、折角、相睦み得べき人類の子を驅つて修羅の鬼と化せしむることです。

事、爭鬪に至つては、も早必至の勢で、勢の赴く處は何物の力を以てしても抑へ得るものではないから、私は、この度の事變にしても、下手なお節介をするよりは赴く處に赴か

しめるより外はないと觀じて居ります、さうして我々としては同時に、尊き生命の種を將來に蒔くことを忘れてはならないと慚じ且つ勵むことのみであります、それはたゞ人々箇箇の心に自覺の種子を蒔くより外は無いことゝ思ひまして、追かけ〳〵、こんな雜な文字をつらねた事を御諒解ありたい。

爭鬪の時は短かく、平和の時は長い、今はこんな事情になりまして、日本の國としては武力的に支那を啓蒙するといふことになつてゐるが、決して支那の國と人とを奪はんとする魔心に出づる筈はなく、お互に目のさめた時に相和し相補うてこの競爭と慘禍の劇しい國際關係を純化して東方より眞正永久の平和の道を開く爲め一つの產みの苦しみに渦ぎないといふ考は、日本人の總てが有意識にも無意識にも皆包有してゐる至誠だと斷言して憚からないものでございます。

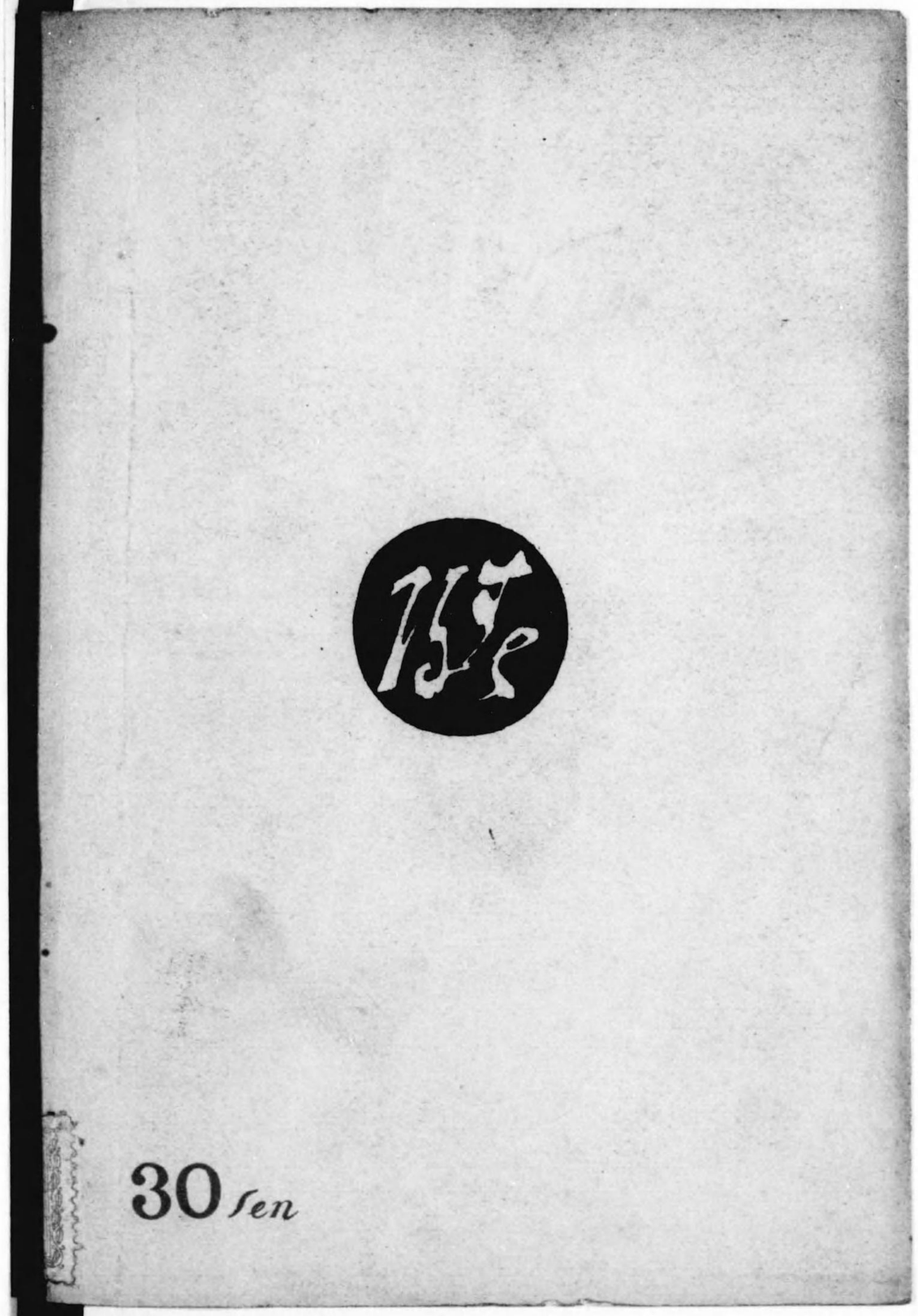
（附言）數千頁を以てしても盡きざる要旨を僅々たる小冊子に寫す事に於て、具體論に入る能はざるは是非もないが、殊に滿蒙に就ては、世間その書が多いから、讀者諸君は既に明治初年征韓論時代より日清、日露の戰役を經て今日に至るまでの歷史を咀嚼し、日本が隱忍の思を藏すること深くして、その發動の彈力の偶然にあらざる所以を充分に豫備智識を持たれるものと信じつゝ筆を進めて行つた點などは、諒解を請はねばならぬ。

昭和六年十二月十五日印刷
昭和六年十二月十九日發行

著作者檢印

日本の一平民として
支那及支那國民に與ふる書
（定價金三十五錢）

著作者　中里介山
東京市日本橋區通三丁目八
發行者　和田利彦
東京市神田區鎌倉町五
印刷者　木屋次郎
東京市神田區鎌倉町五
印刷所　東陽印刷所
東京市日本橋區通三丁目八

發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一
振替口座東京一六一七

終